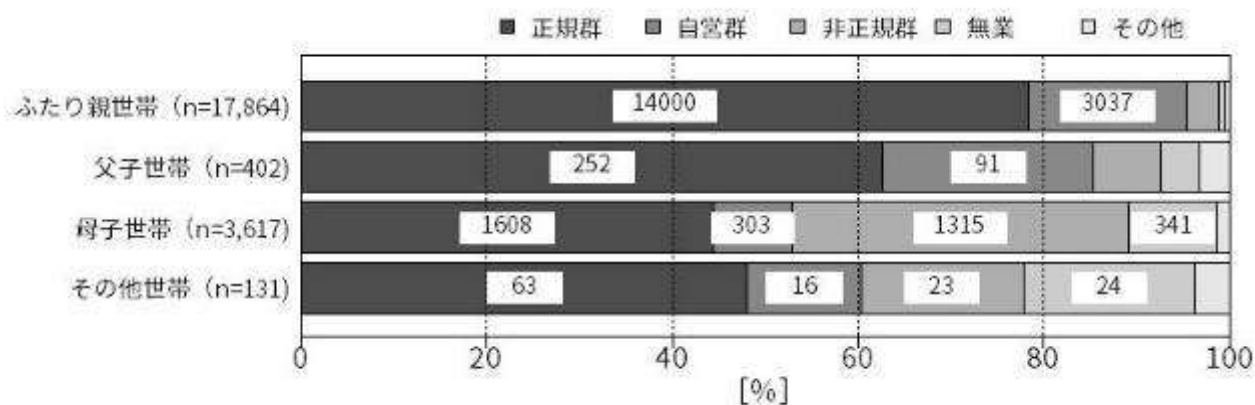


世帯構成別に見た、就労状況（保護者票 就労状況）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

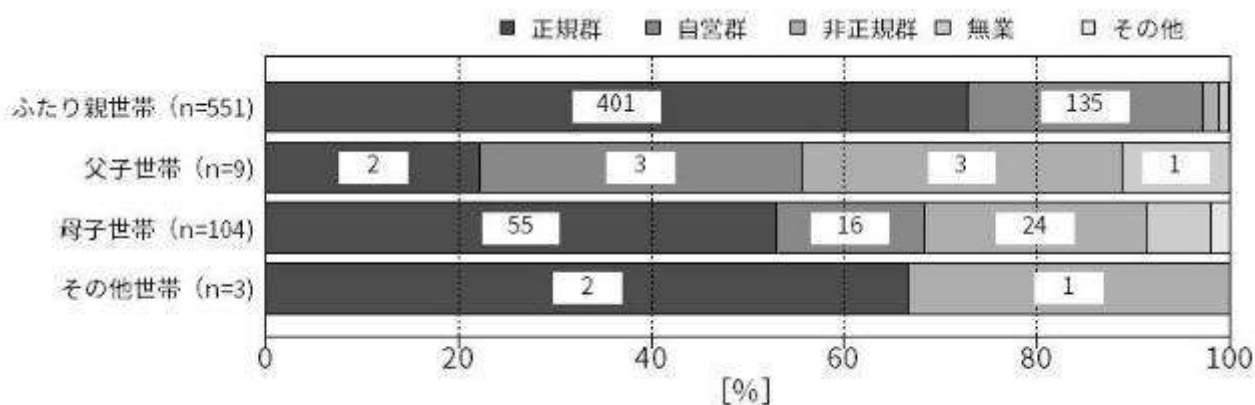
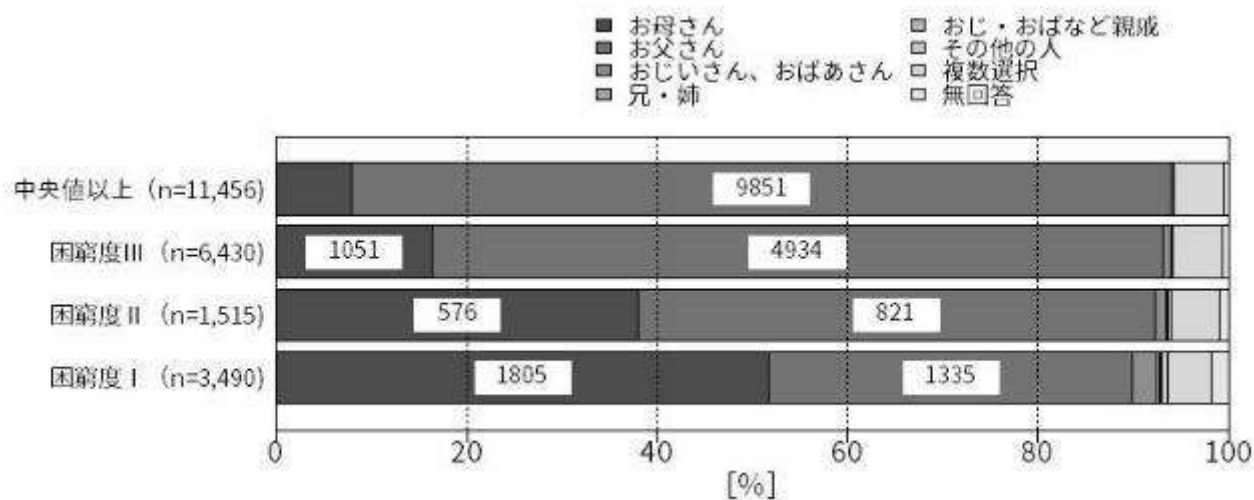


図 177. 世帯構成別に見た、就労状況

世帯構成別に就労状況を見ると、「ふたり親世帯」では「正規群」の割合が 72.8%であったが、「父子世帯」では 22.2%、「母子世帯」では 52.9%である。「非正規群」は、「父子世帯」では 33.3%、「母子世帯」では 23.1%となっている。

困窮度別に見た、生計の支えとなる人（保護者票 問 30(2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

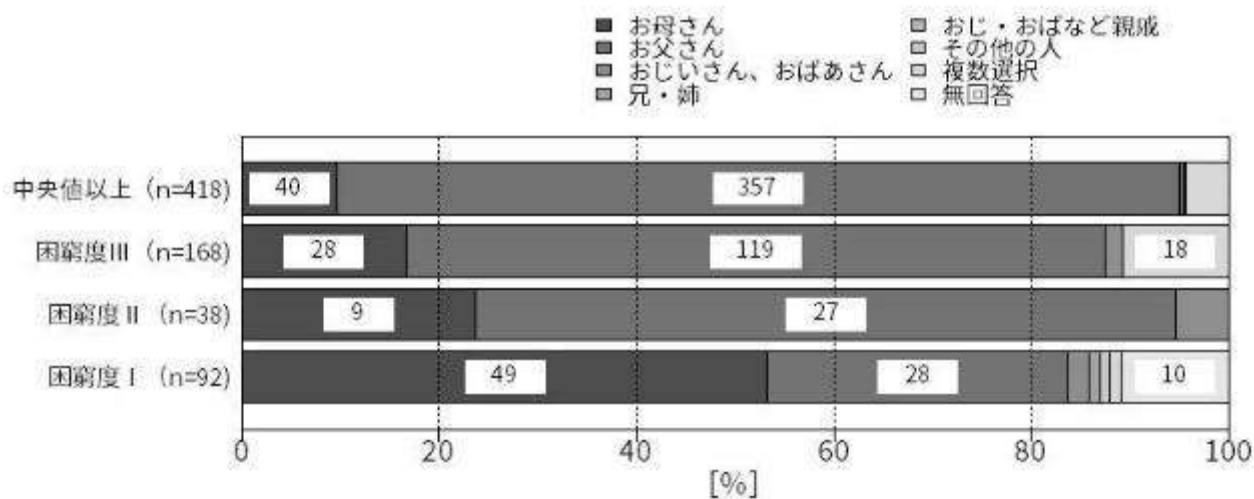
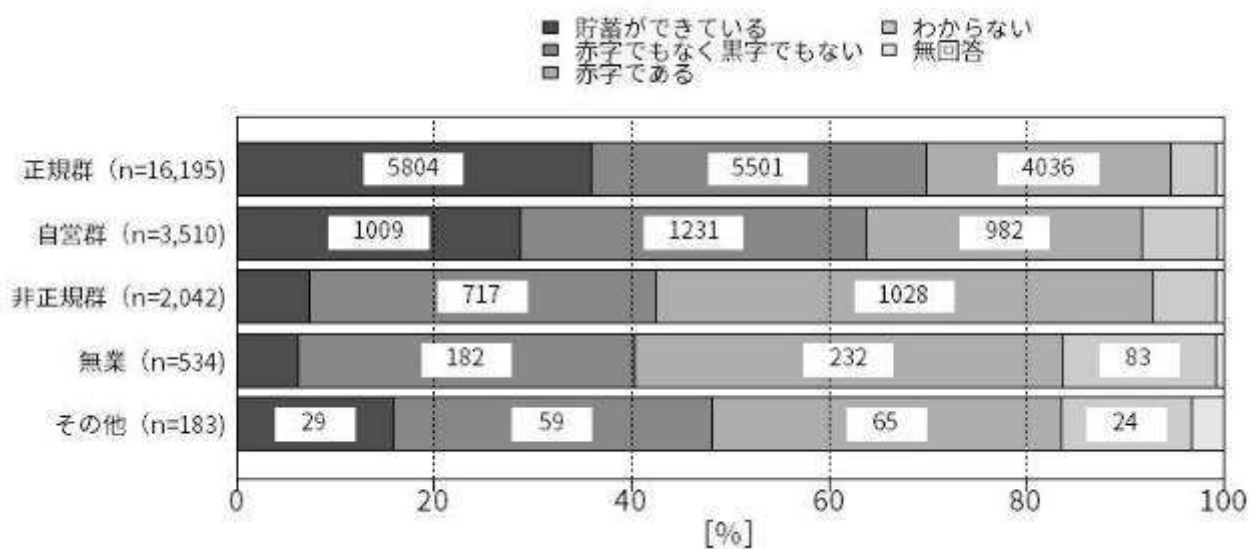


図 178. 困窮度別に見た、生計の支えとなる人

困窮度別に生計の支えとなる人を見ると、中央値以上群では「お父さん」という回答が 85.4%であった。困窮度が高まるにつれ、「お母さん」という回答が多くなる。困窮度Ⅱ群では「お母さん」という回答は 23.7%、困窮度Ⅰ群では 53.3%であった。

就労状況別に見た、家計状況（保護者票 問 6(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

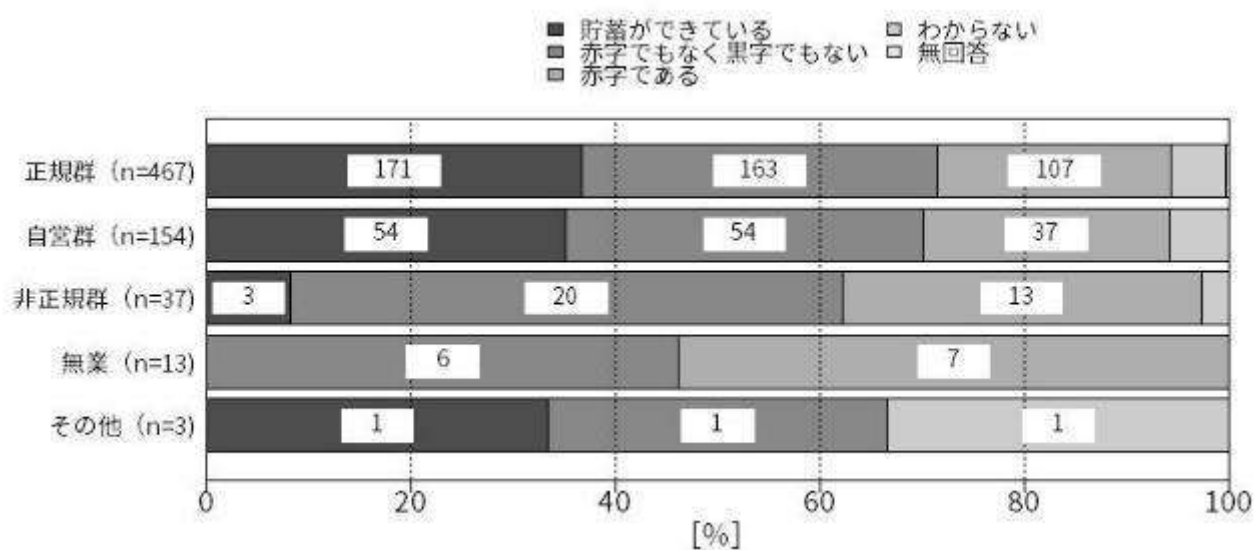


図 179. 就労状況別に見た、家計状況

就労状況別に家計状況を見ると、「正規群」・「自営群」では貯蓄ができている割合がそれぞれ、36.6%、35.1%であった。「非正規群」では「赤字である」と回答した人が 35.1%である。「赤字でもなく黒字でもない」群に大きな差は見られない。

＜雇用に関する考察＞

本調査では、雇用形態が所得階層の分布に反映されていることが明らかになった。中央値以上の群では、79.5%が正規雇用を占める一方で、困窮度Ⅰの群では、34.5%であった。非正規雇用の割合は、中央値以上では0.6%であったにもかかわらず、困窮度Ⅰの群では27.6%であった。正規雇用であるにもかかわらず、困窮度Ⅰの群に属する世帯があるということは、ワーキングプアなどの問題を抱えている可能性もあることには留意しておきたい。

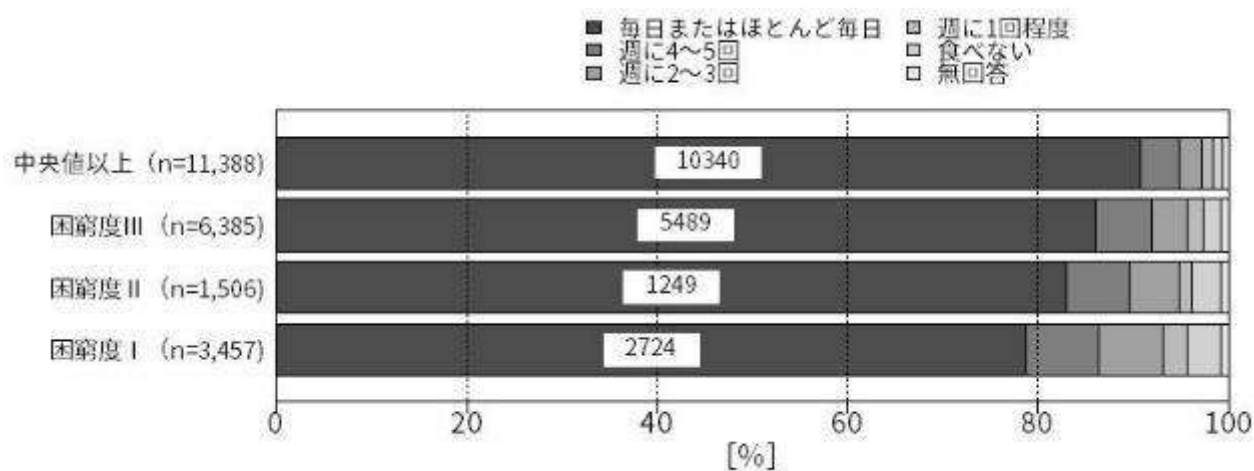
困窮度が高い群ほど、学歴が低いという結果も見られた。困窮度Ⅰの群では、大学卒である割合は父親で5.4%、母親で7.6%であったのに、中央値以上の群では45.5%と25.6%であった。中学卒、もしくは高校中退である割合は、中央値以上では父親が2.9%、母親が1.2%であったのに対して、困窮度Ⅰの群では父親で10.9%、母親で17.4%が該当した。学歴が高い群ほど、正規雇用の割合が高かった。

雇用形態を世帯構成で見た場合、非正規雇用の割合はふたり親世帯の場合1.6%であったのに対して、父子世帯は人数が少なく言及しにくいですが、母子世帯では23.1%と顕著な差が見られた。困窮度Ⅰの群では、主たる生計維持者が母親である場合が53.3%となっている。雇用形態によって貯蓄状態にも差が見られた。正規雇用の36.6%は貯蓄ができていると回答した一方で、非正規群の回答は8.1%にとどまった。

3-3. 健康

困窮度別に見た、朝食の頻度（子ども票 問5(1)）

<大阪市24区>



<大阪市西区>

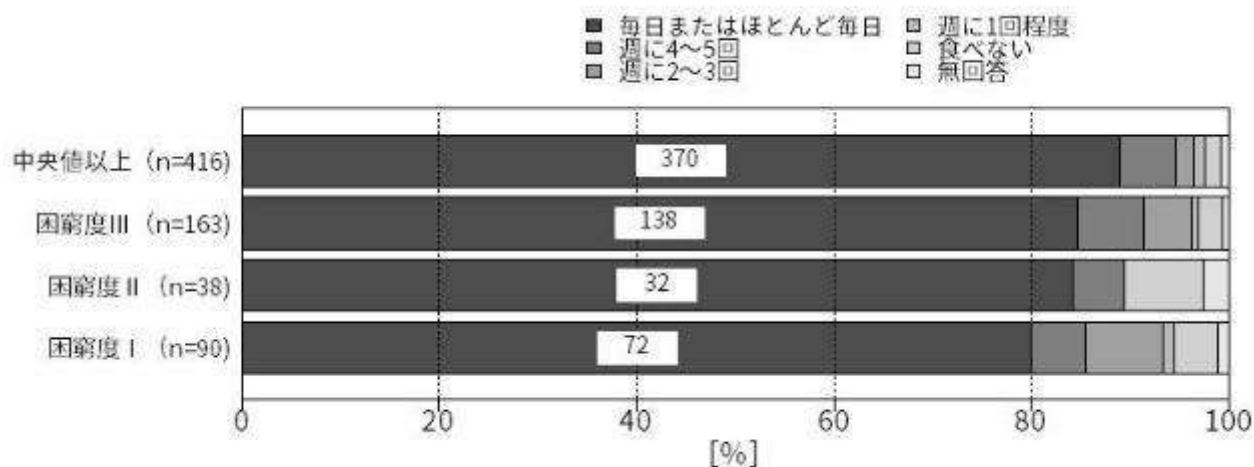
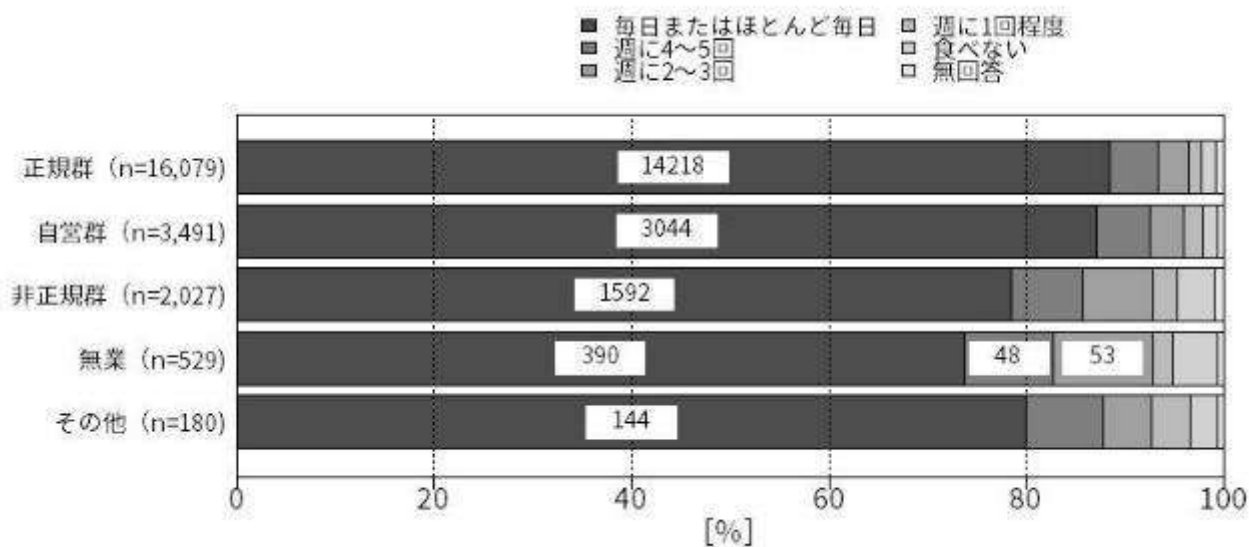


図 180. 困窮度別に見た、朝食の頻度

困窮度別に朝食の頻度を見ると、困窮度が高くなるにつれ、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる割合が低くなっている。

就労状況別に見た、朝食の頻度（子ども票 問5(1)）

<大阪市24区>



<大阪市西区>

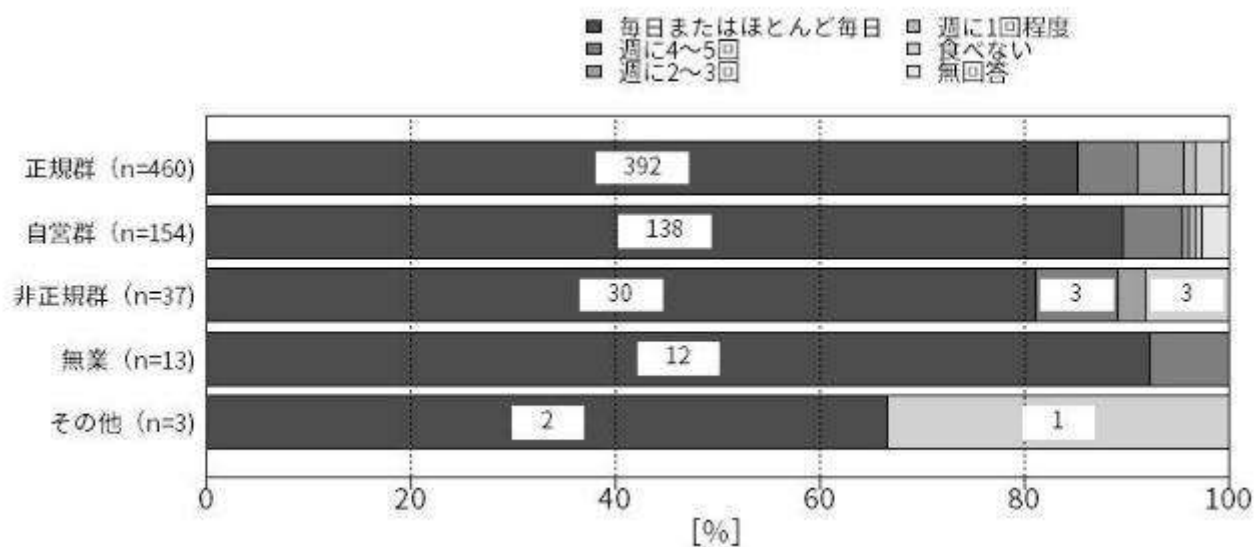
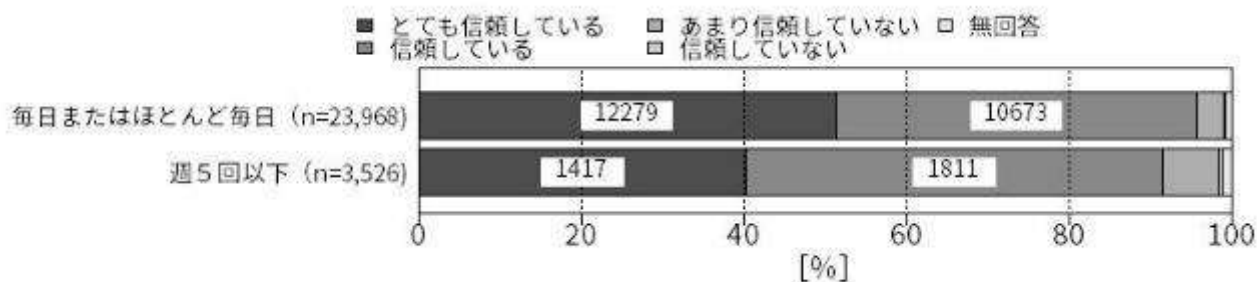


図 181. 就労状況別に見た、朝食の頻度

就労状況別に朝食の頻度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる割合は、「正規群」で85.2%、「自営群」で89.6%、「非正規群」で81.1%、「無業」で92.3%、「その他」で66.7%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）
 （子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

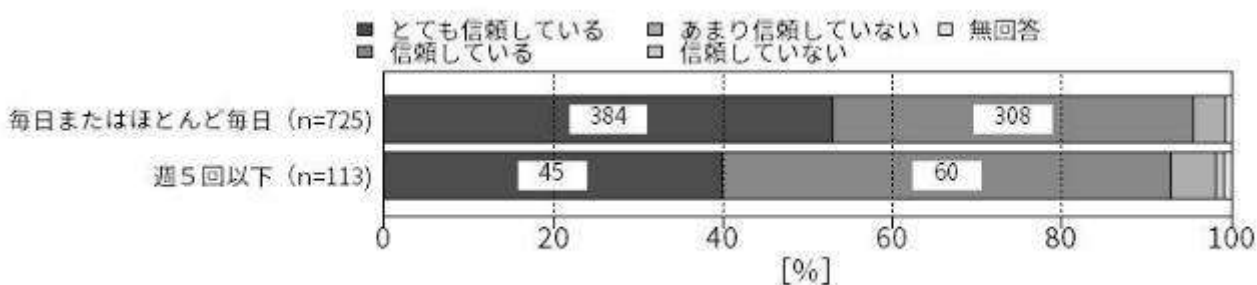
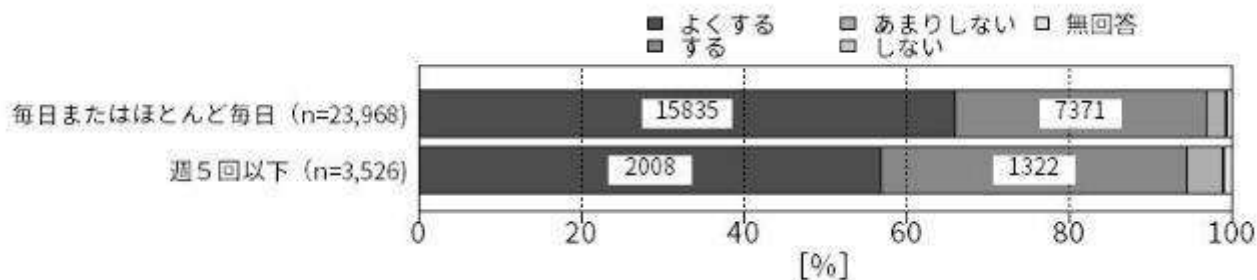


図 182. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもを「とても信頼している」との回答が 53.0%であったのに対し、「週 5 回以下」では、「とても信頼している」と回答した人は 39.8%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）
 （子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

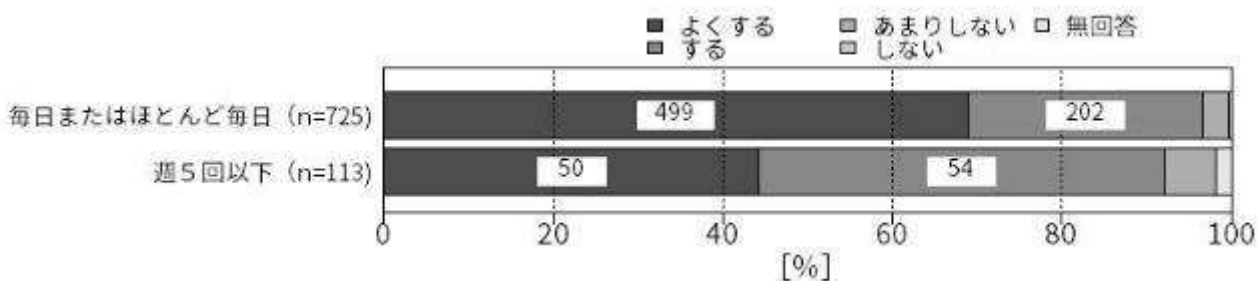
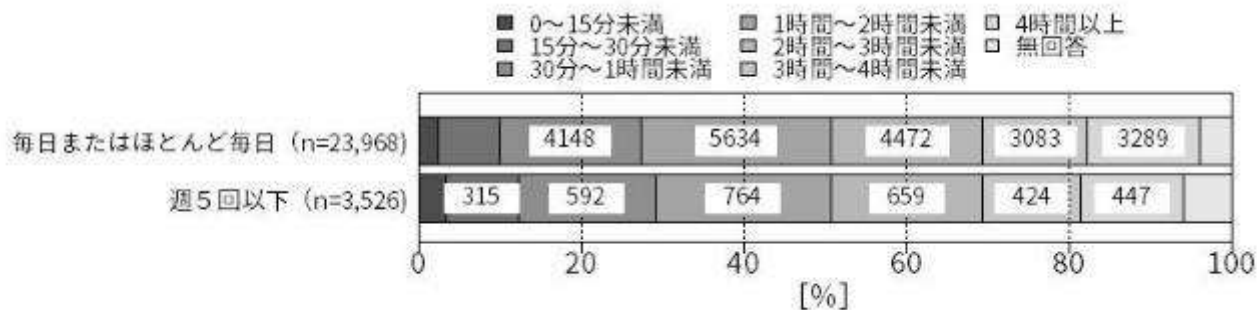


図 183. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもと「よく会話をする」との回答が 68.8%であり、「週 5 回以下」では、「よく会話をする」と回答した人は 44.2%であった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））
（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

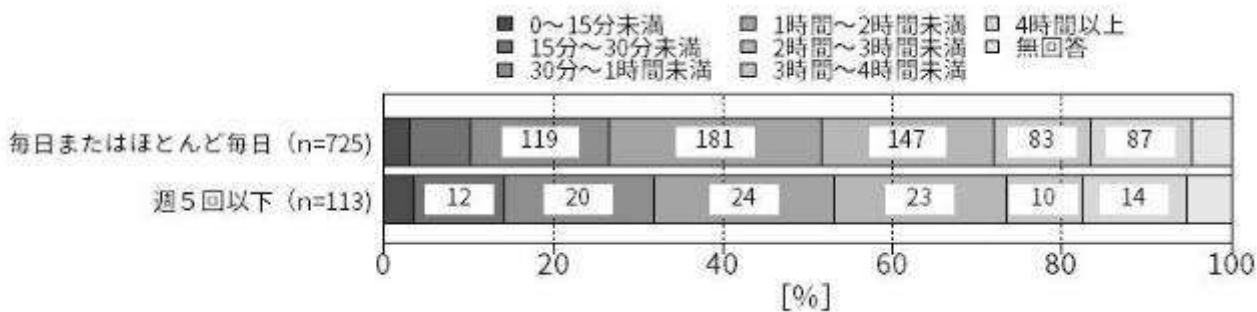
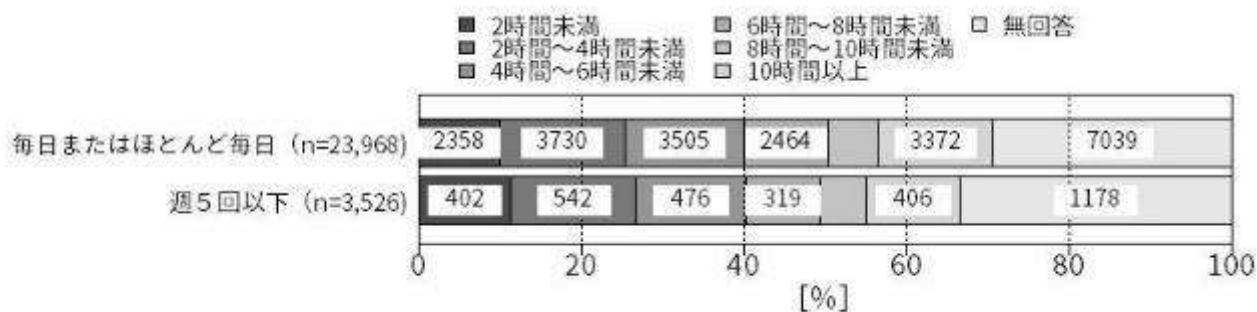


図 184. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり
（子どもと一緒にいる時間（平日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが「週5回以下」の人よりも平日に子どもと一緒にいる時間が長くなっている傾向にあった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））
（子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

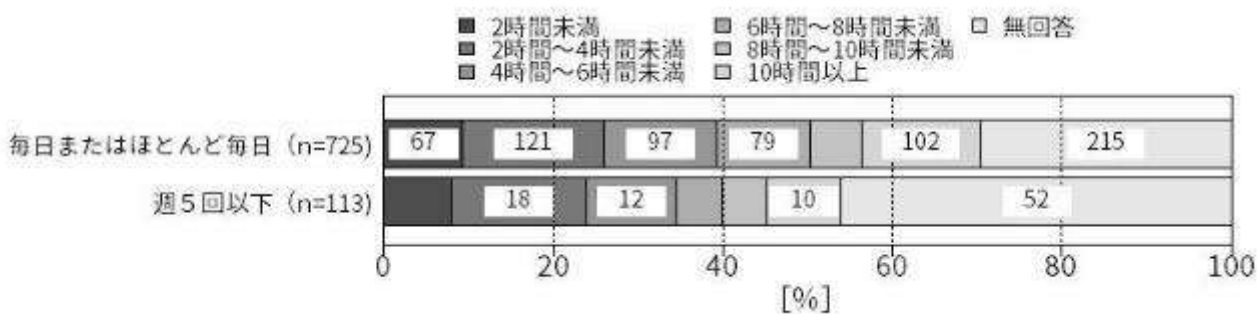
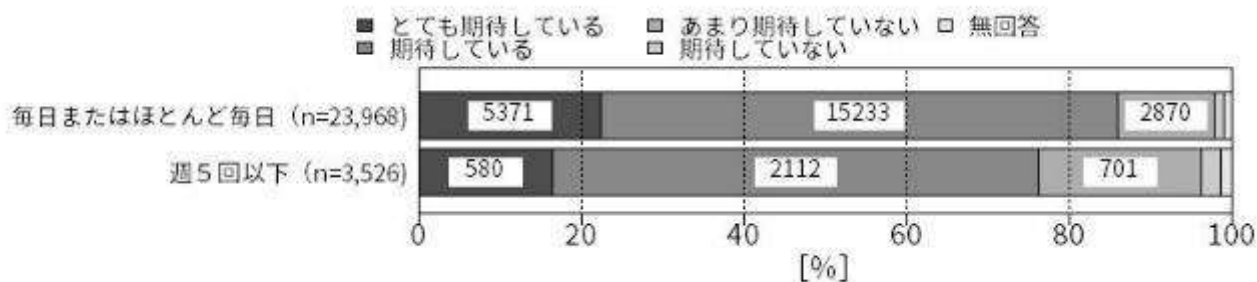


図 185. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり
（子どもと一緒にいる時間（休日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが、「週5回以下」の人よりも休日に子どもと一緒にいる時間が長くなっている傾向にあった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）
 （子ども票 問 5(1) × 保護者票 問 14(4)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

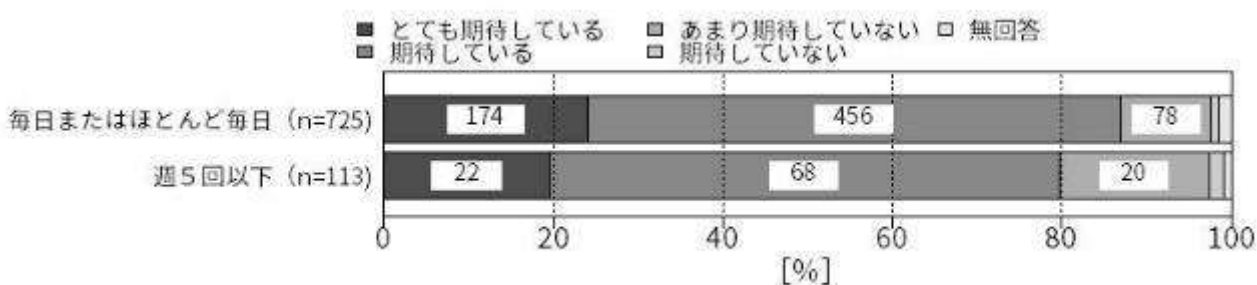


図 186. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

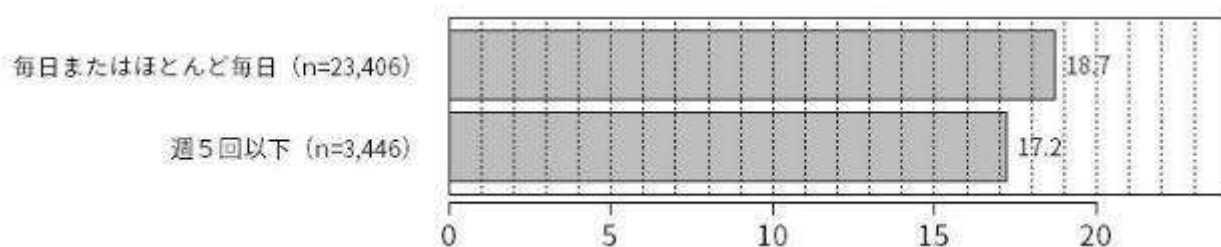
朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では、「とても期待している」「期待している」をあわせて、86.9%であったのに対して、「週5回以下」の人では、「とても期待している」「期待している」と回答した人をあわせて 79.7%である。

朝食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

(子ども票 問 5(1) × 子ども票 問 26(1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

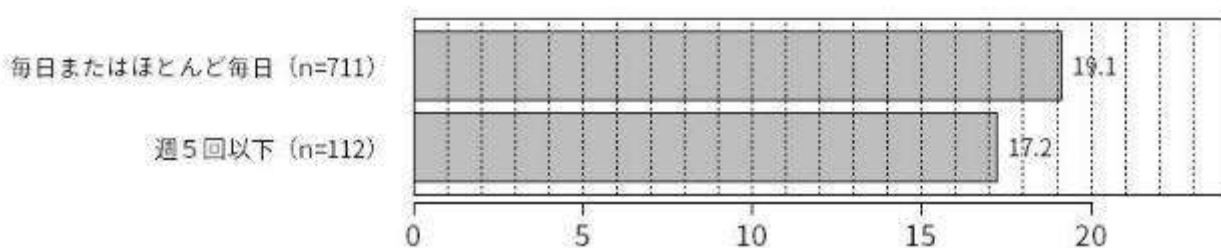
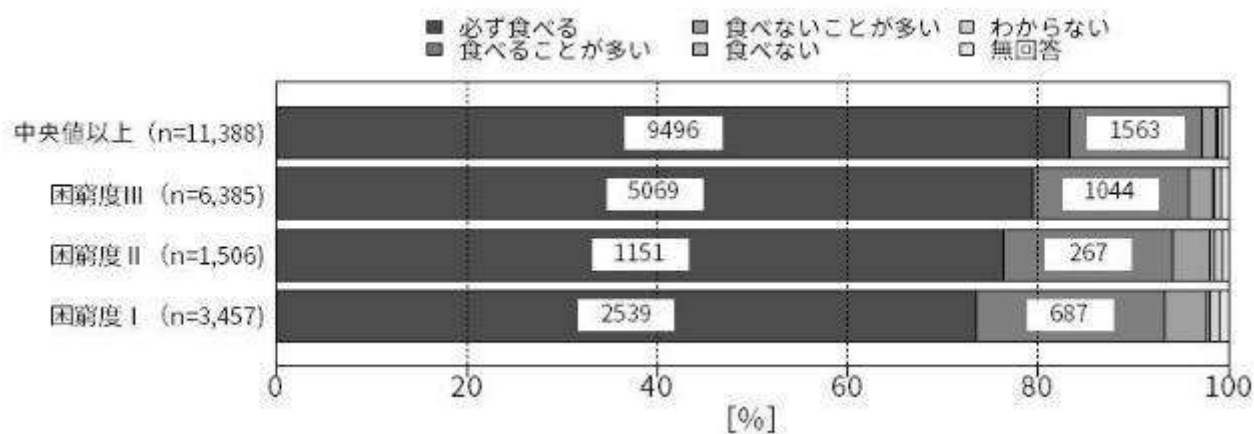


図 187. 朝食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

朝食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、19.1 点であるのに対して、「週 5 回以下」では、17.2 点である。

困窮度別に見た、昼食の頻度（子ども票 問 7）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

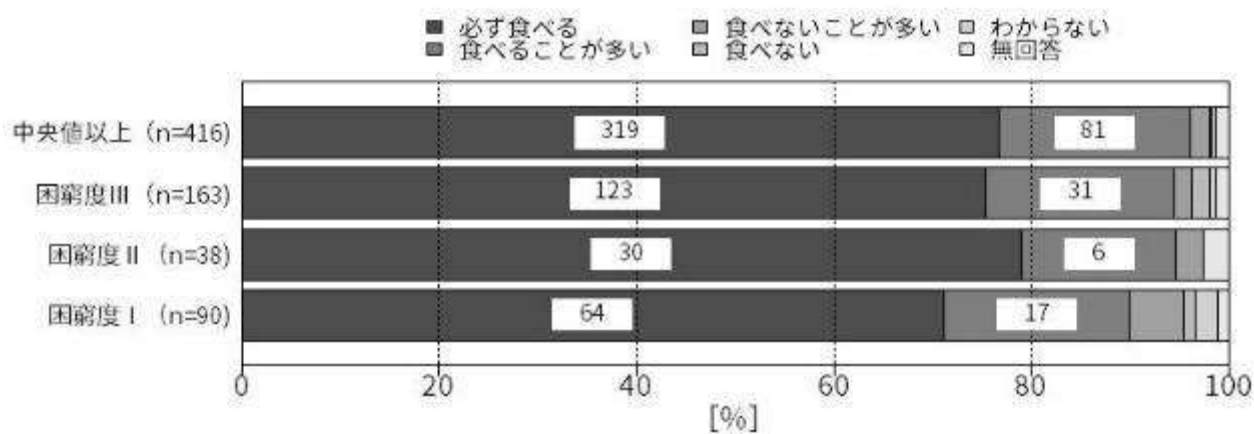
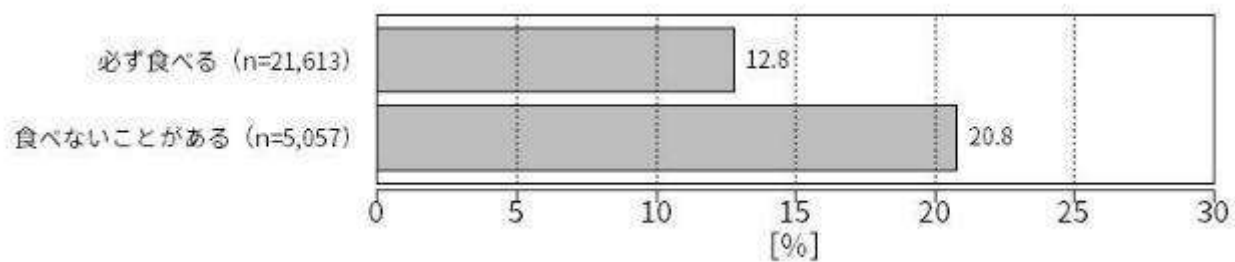


図 188. 困窮度別に見た、昼食の頻度

中央値以上群では、昼食を「必ず食べる」が 76.7%であったのに対し、困窮度Ⅱ群では 78.9%、困窮度Ⅰ群では 71.1%であった。

昼食の頻度別に見た、相談相手のいない割合（子ども票 問7 × 子ども票 問22）

<大阪市24区>



<大阪市西区>

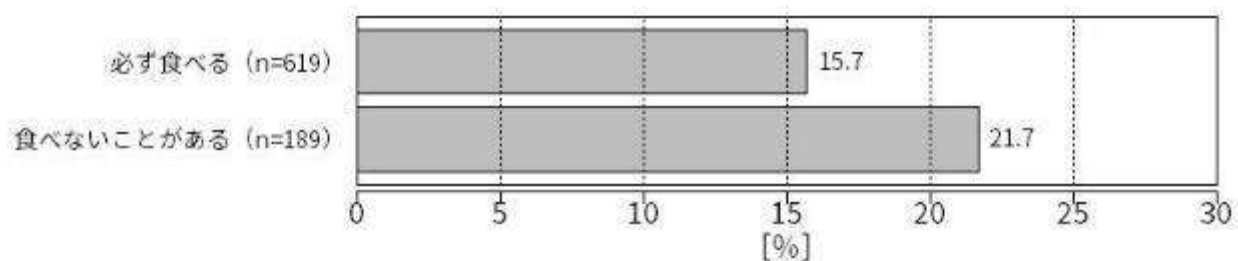


図 189. 昼食の頻度別に見た、相談しない割合

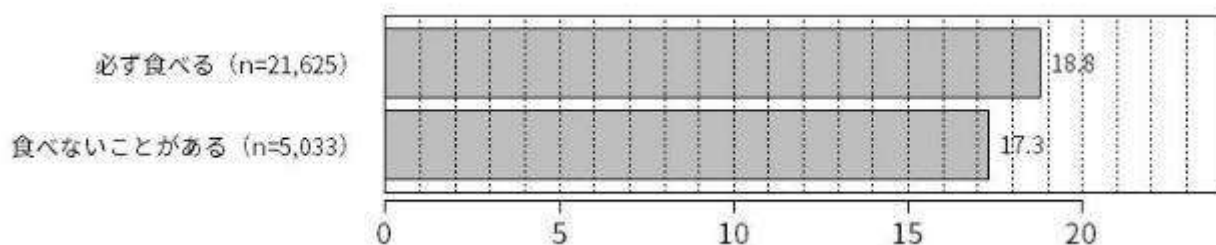
昼食を食べない群では、「相談しない」と答えた割合が 21.7%である。

昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

(子ども票 問 7 × 子ども票 問 26(1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

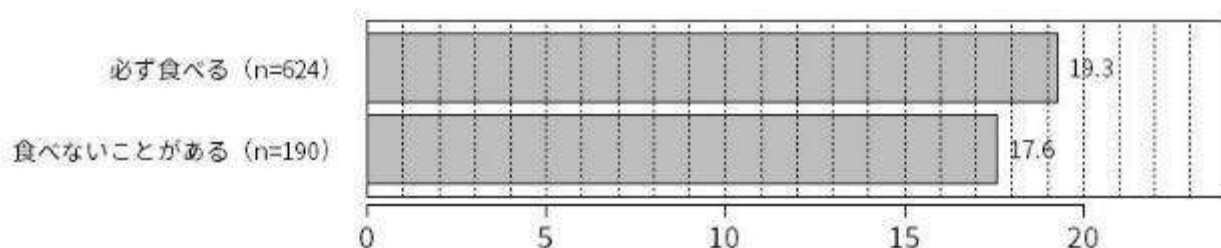
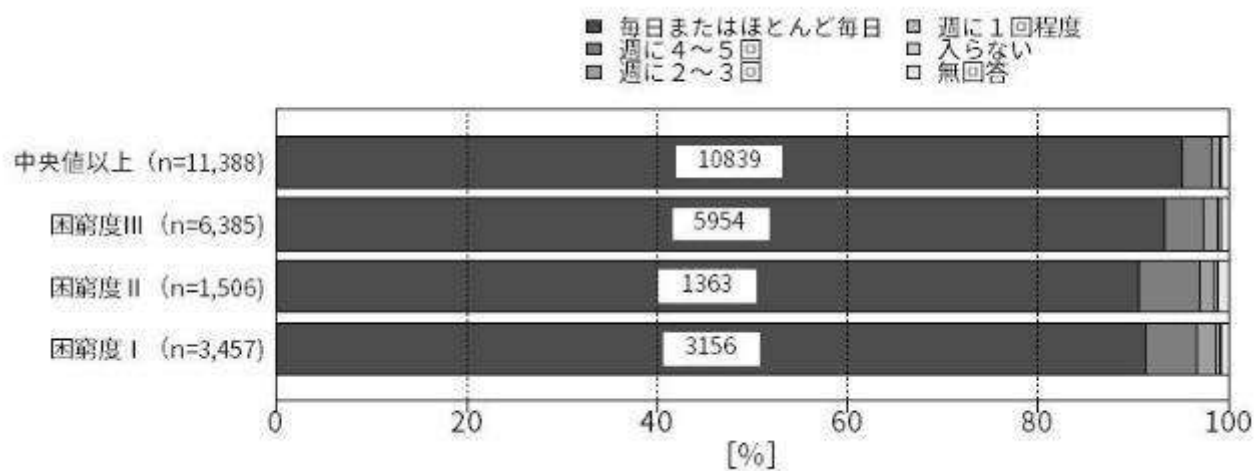


図 190. 昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

休日の昼食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「必ず食べる」と回答した人の得点が 19.3 点であるのに対して、「食べないことがある」と回答した人は 17.6 点である。

困窮度別に見た、入浴頻度（子ども票 問8）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

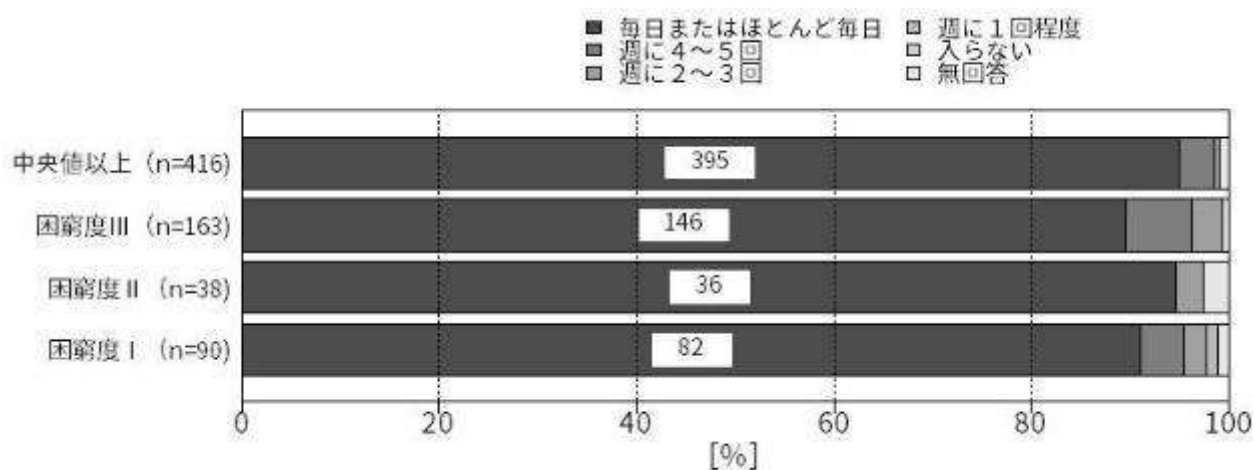
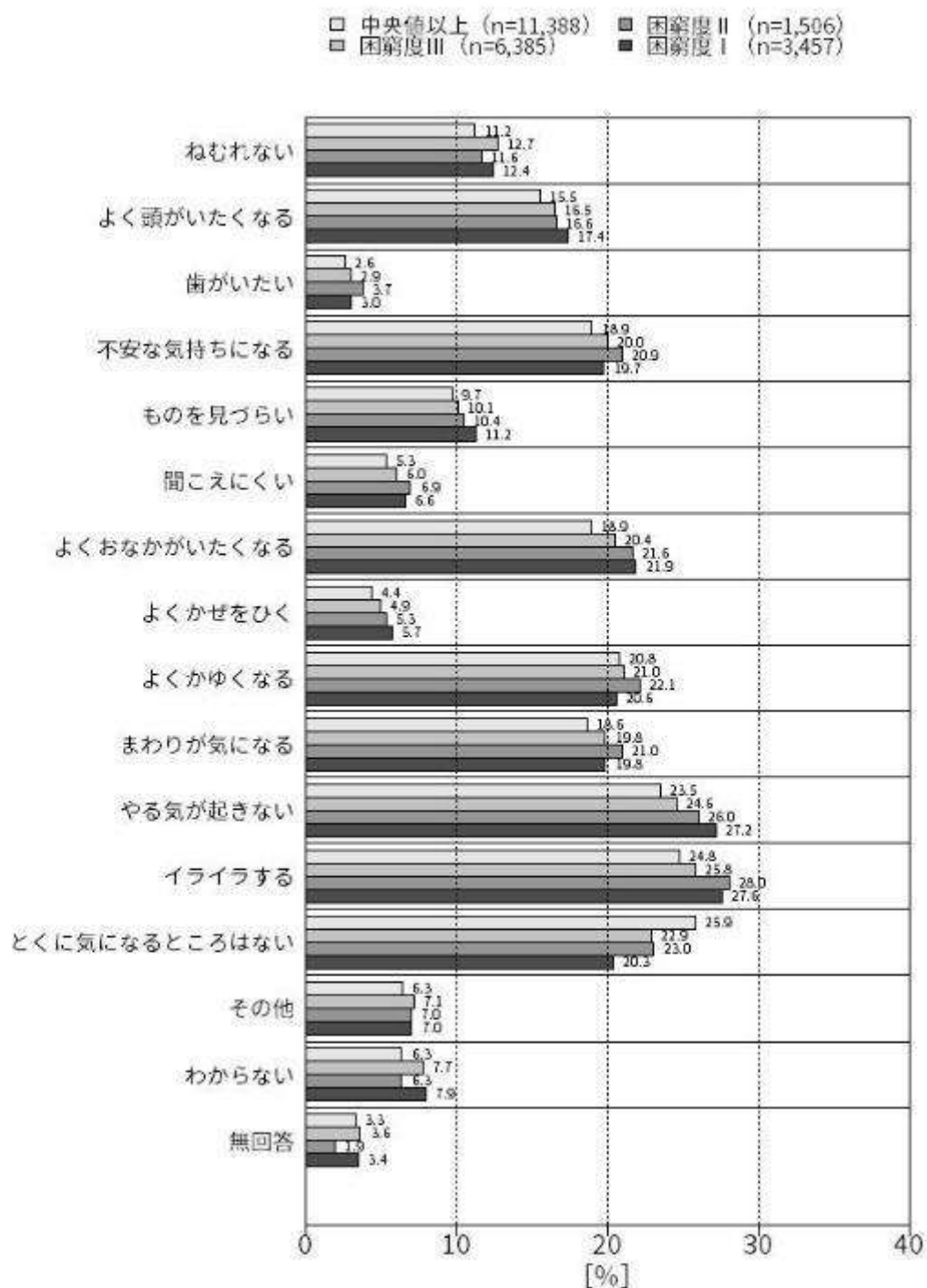


図 191. 困窮度別に見た、入浴頻度

困窮度別に入浴頻度を見ると、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合は中央値以上群では95.0%、困窮度Ⅰ群では91.1%であった。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（子ども票 問 24）

<大阪市 24 区>



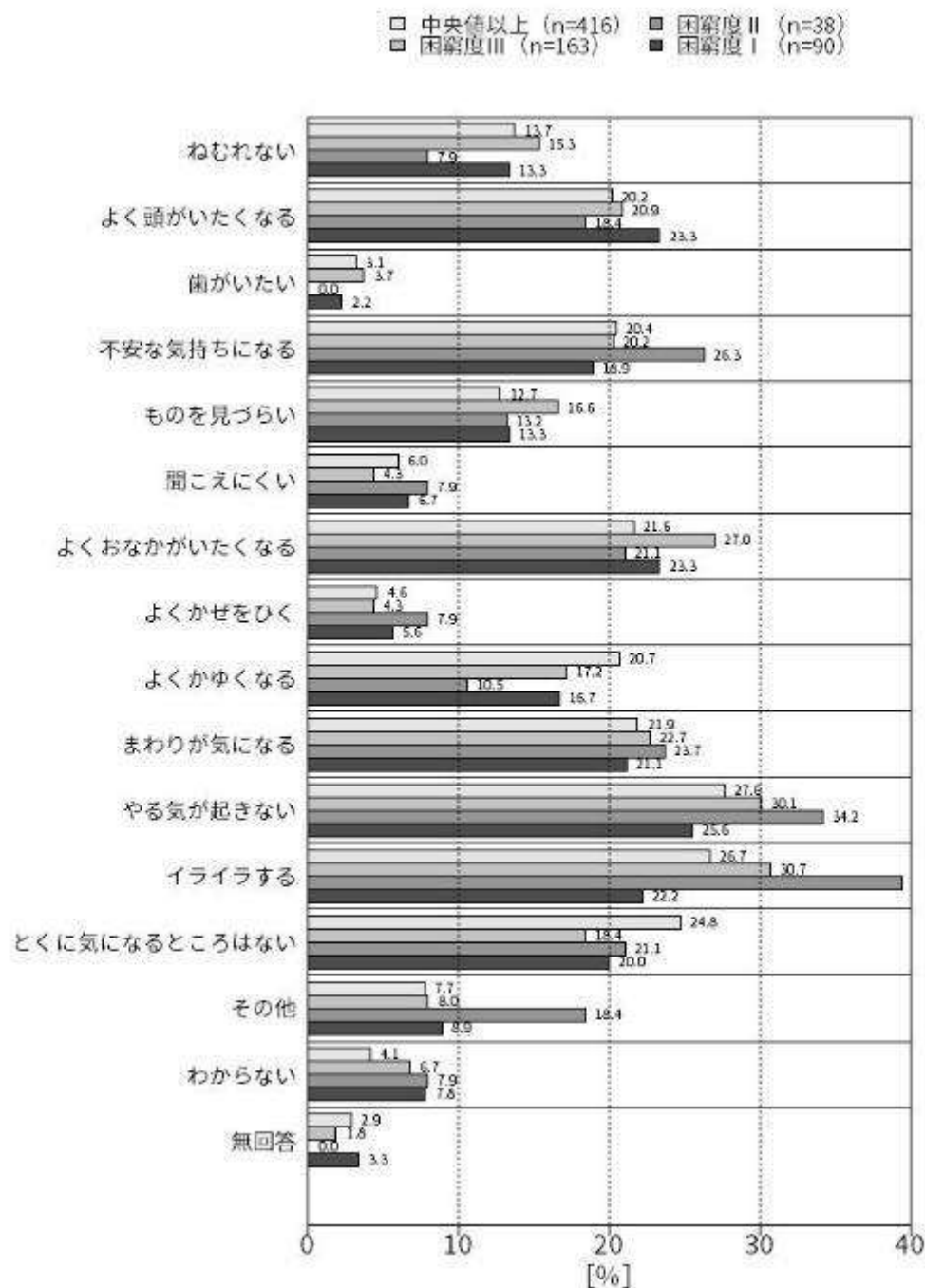
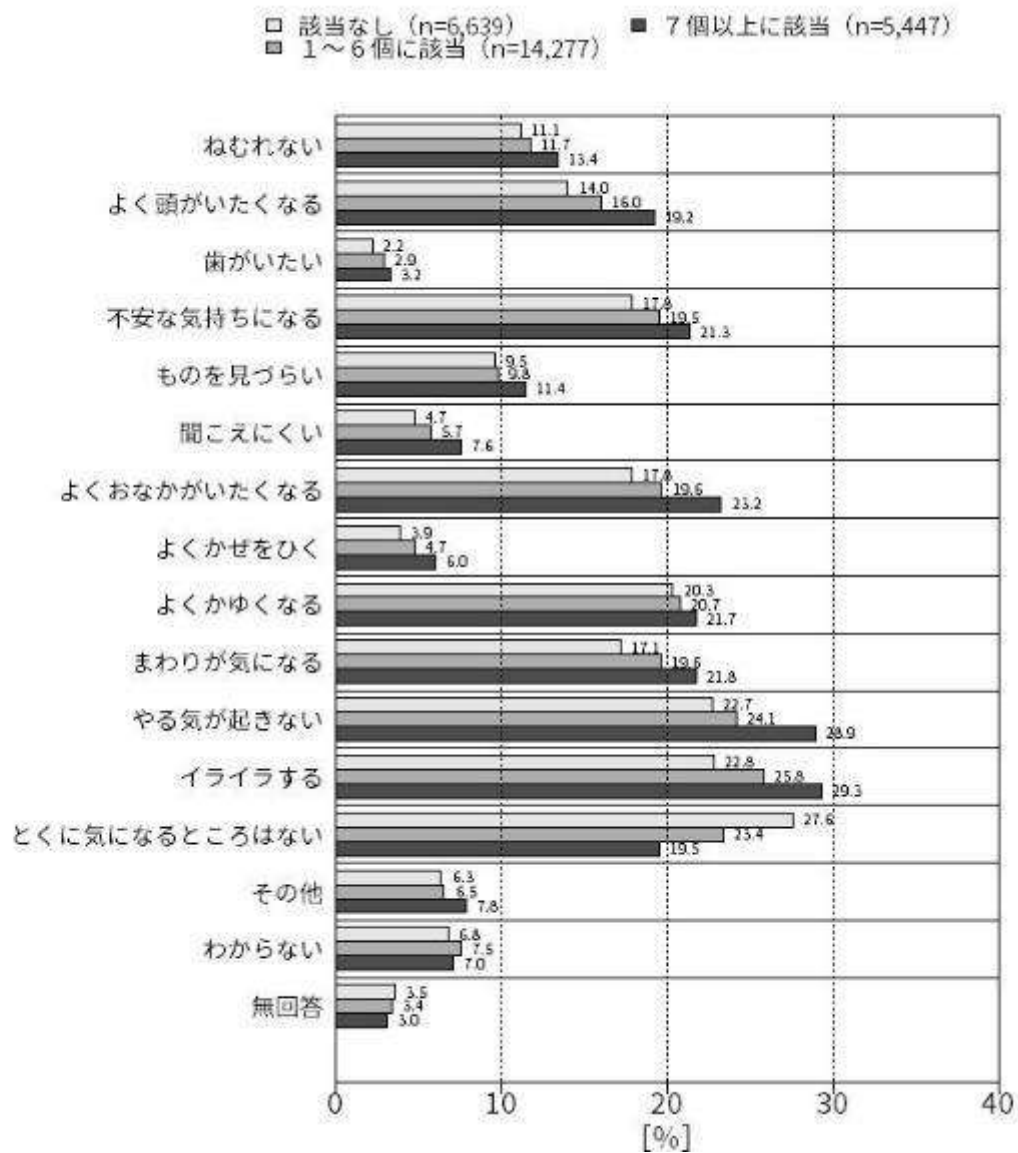


図 192. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で大きな差は見られない。しかし、中央値以上群と大きな差はないものの、困窮度Ⅰ群では、「やる気が起きない」25.6%（中央値以上群に対して、1.1倍）、「イライラする」22.2%（1.1倍）など、心理的・精神的症状を示す項目での割合の高さも無視できない。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること
 (保護者票 問7 × 子ども票 問24)

<大阪市24区>



<大阪市西区>

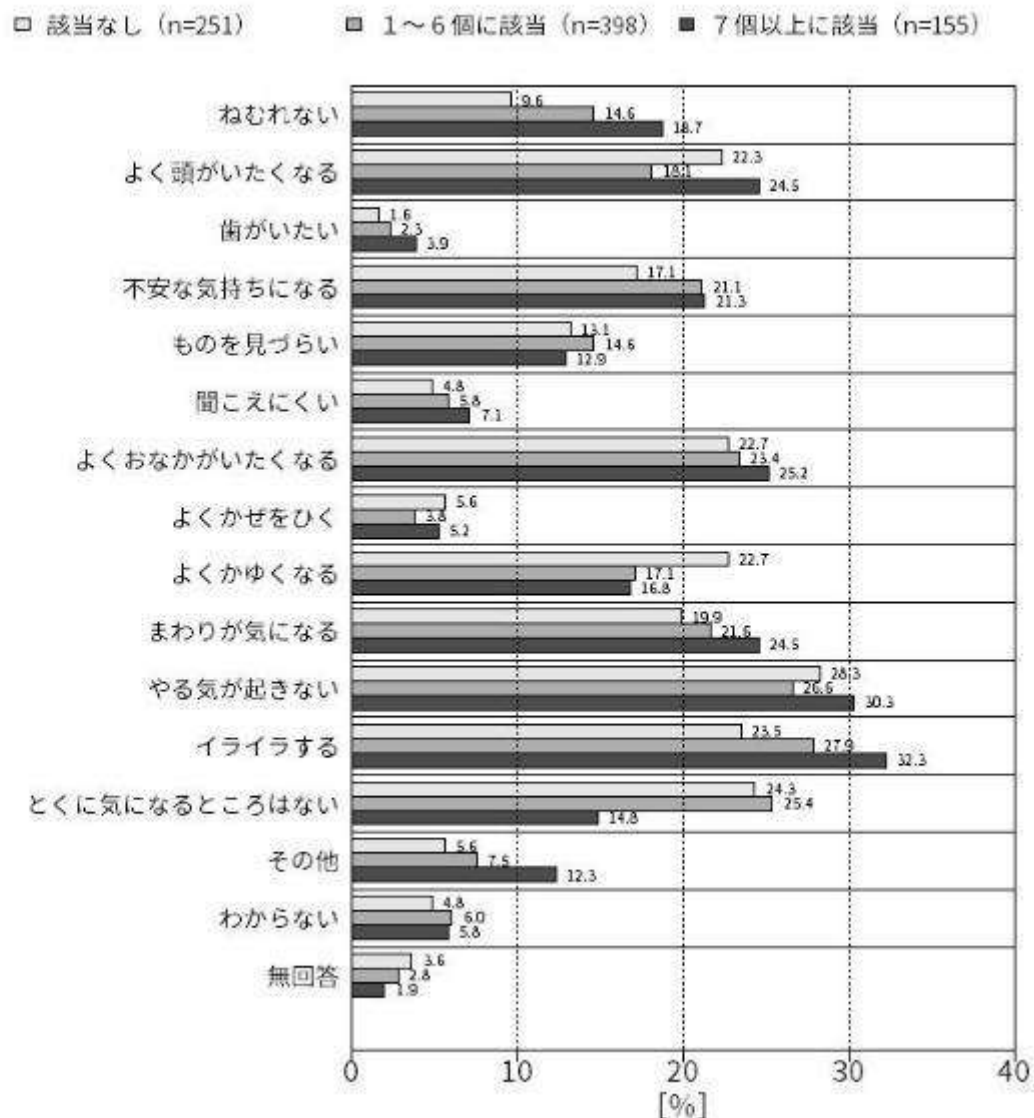
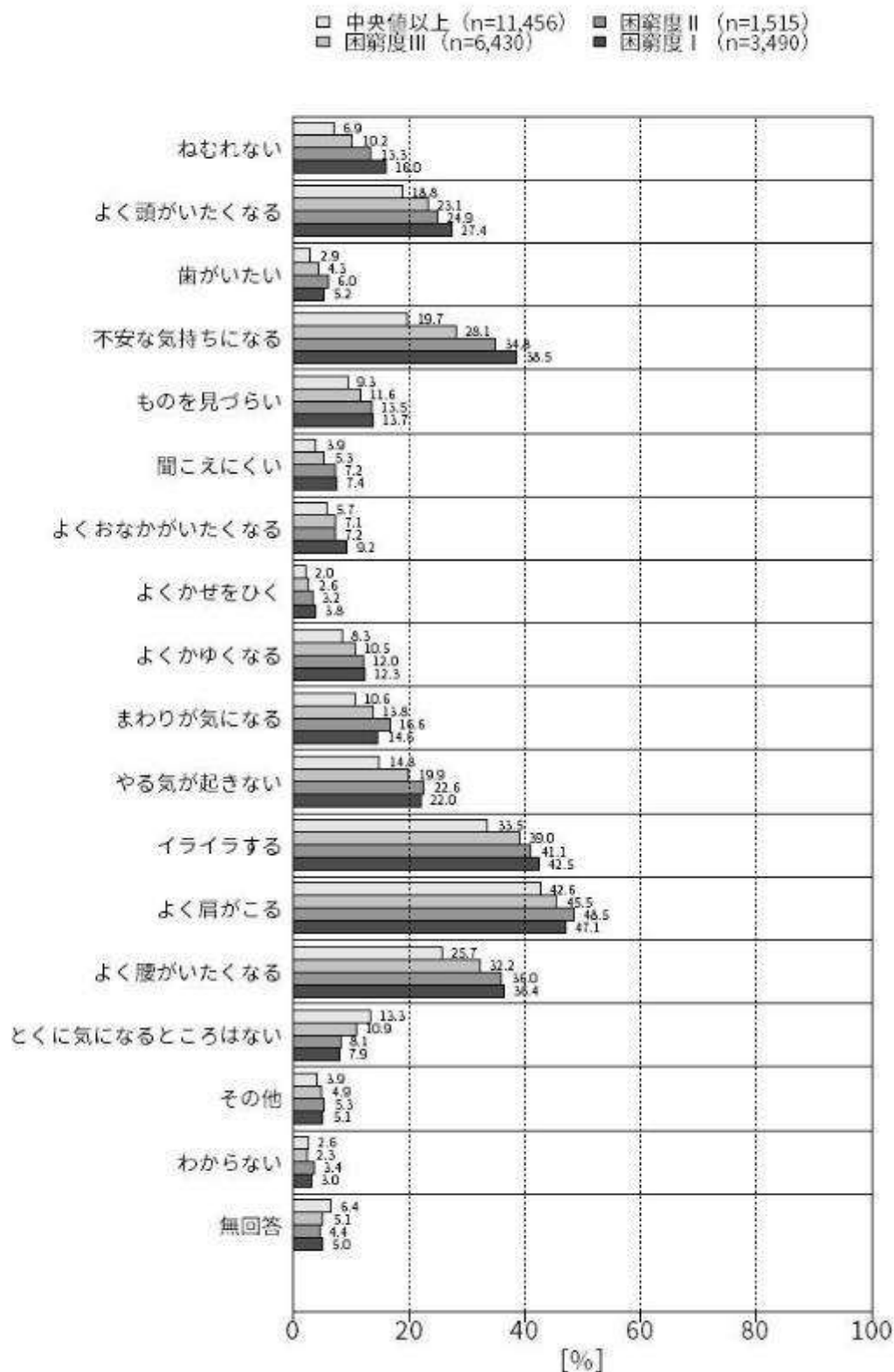


図 193. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上該当」群の数値を挙げると、「歯がいたい」3.9%（「該当なし」に対し2.4倍）、「ねむれない」18.7%（1.9倍）、「聞こえにくい」7.1%（1.5倍）となっている。さらに、「該当なし」と上記の項目ほどの差はないものの、「7個以上に該当」と回答した人では、「イライラする」32.3%（1.4倍）、「不安な気持ちになる」21.3%（1.2倍）、など、ここでも心理的・精神的状況を示す項目での割合の高さが示された。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票 問 26）

<大阪市 24 区>



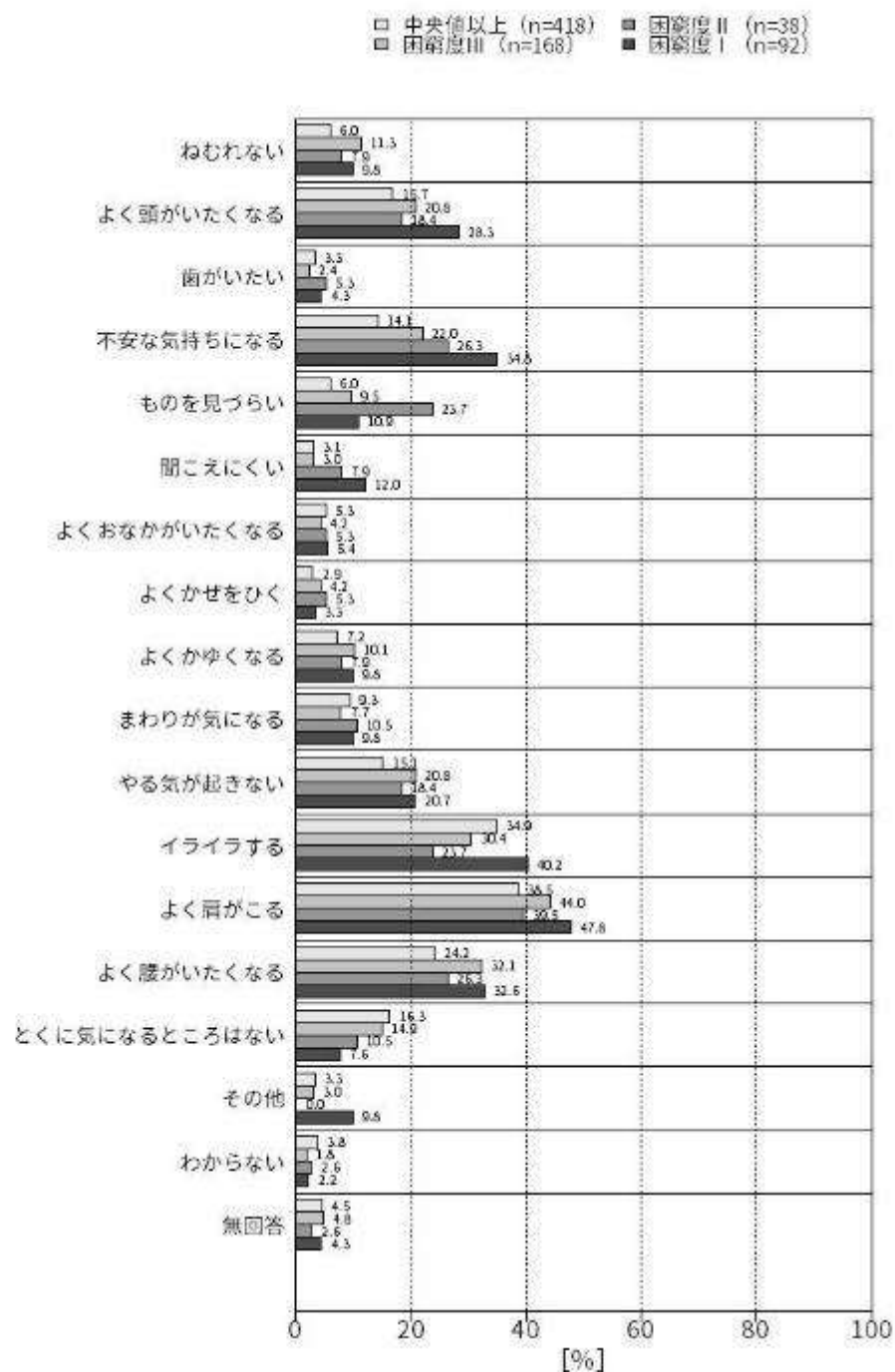


図 194. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になること（保護者）を見ると、多くの項目において、困窮度が高まるにつれ、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの項目が高くなっている。特に困窮度Ⅰ群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「聞こえにくい」12.0%（中央値以上群に対して、3.9倍）、「不安な気持ちになる」34.8%（2.5倍）、「ものを見づらい」10.9%（1.8倍）となっている。つづいて、「よく頭がいたくなる」28.3%（1.7倍）、「ねむれない」9.8%（1.6倍）という影響もみられた。

<大阪市 24 区>



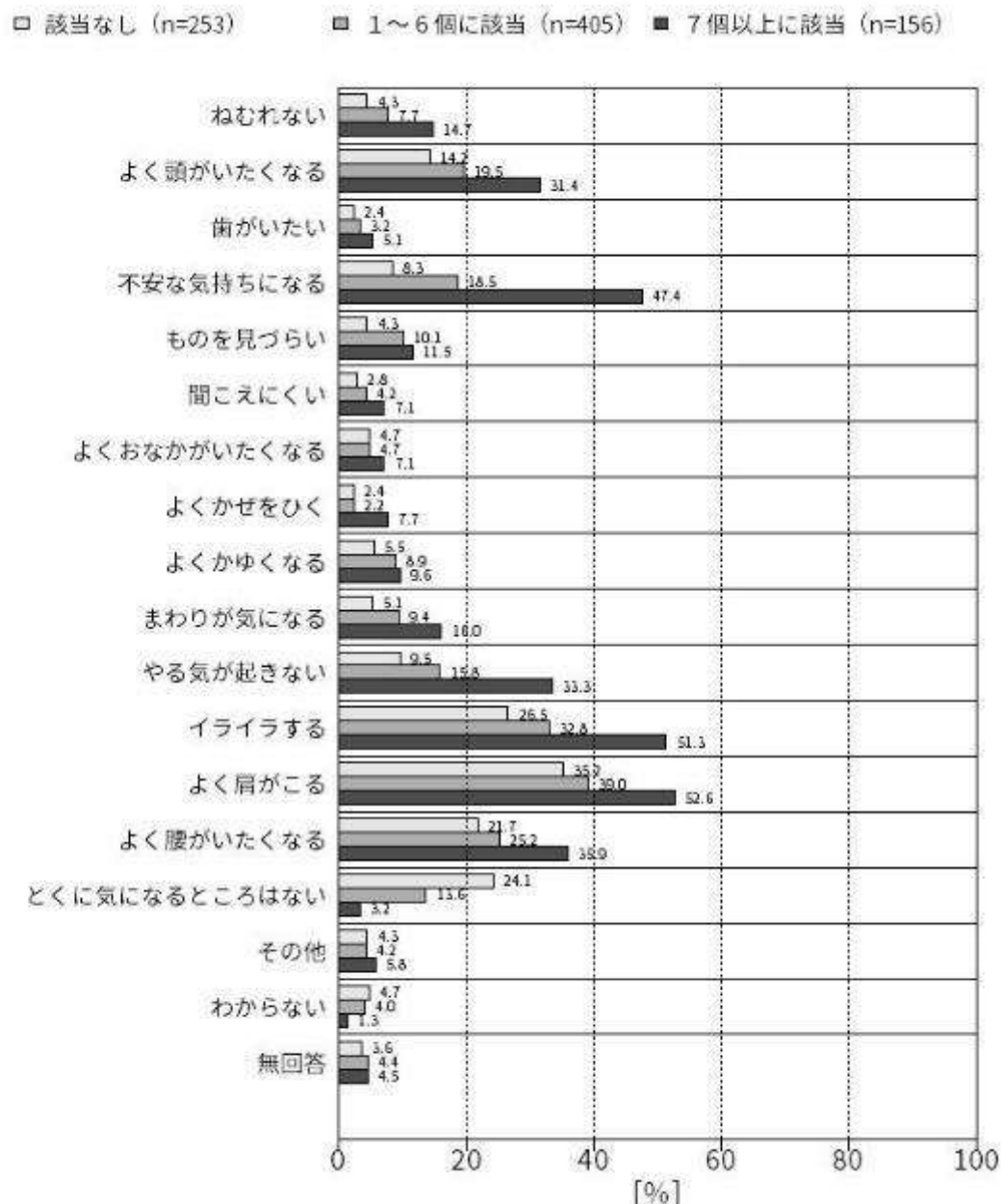
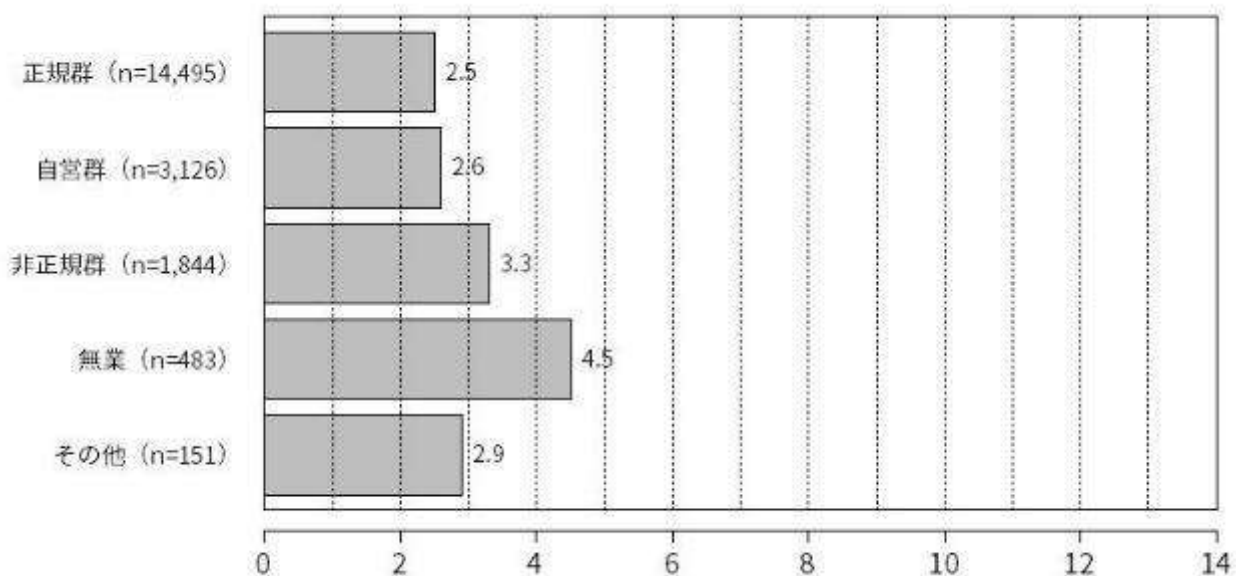


図 195. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上に該当」群の数値を挙げると、「不安な気持ちになる」47.4%（「該当なし」に対し5.7倍）、「やる気が起きない」33.3%（3.5倍）、「ねむれない」14.7%（3.4倍）となっている。さらに、「該当なし」と上記の項目ほどの差はないものの、「7個以上に該当」と回答した人では、「イライラする」51.3%（1.9倍）、「やる気が起きない」33.3%（3.5倍）など、ここでも心理的・精神的状況を示す項目での割合の高さが示された。

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

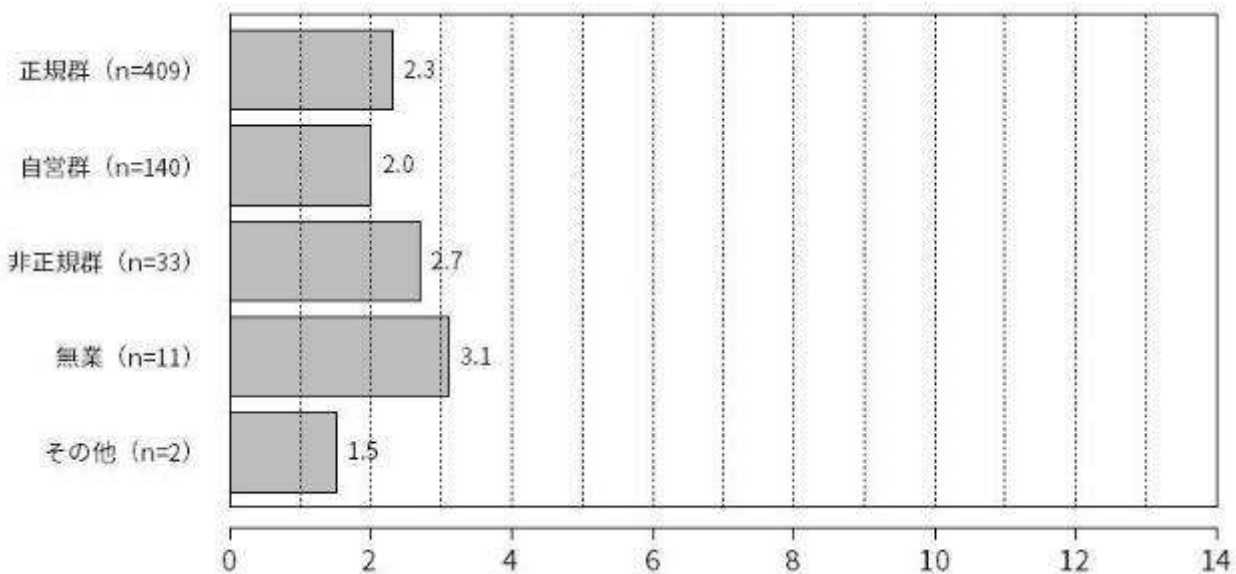


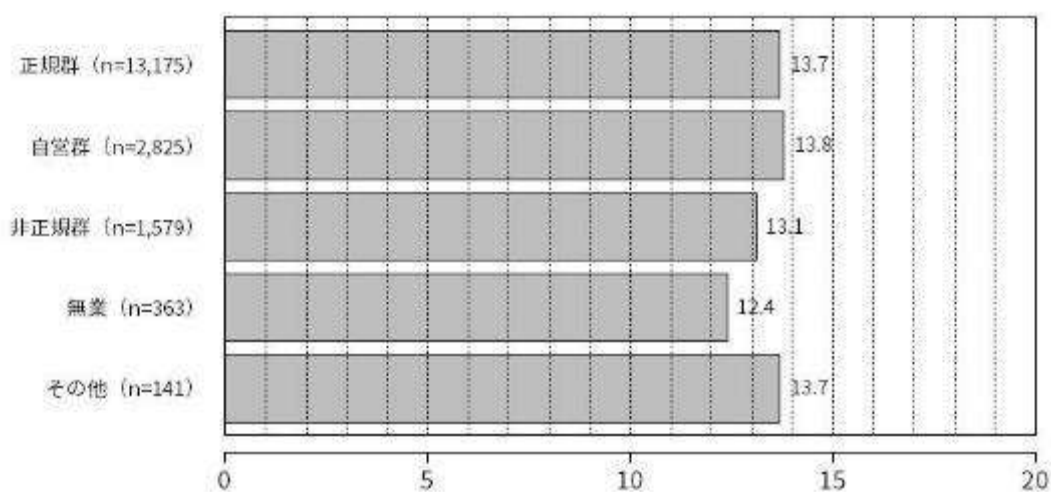
図 196. 就労状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当個数

就労状況別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「正規群」では 2.3 個、「自営業」では 2.0 個、「非正規群」では 2.7 個、「無業」群では 3.1 個であった。

就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー（保護者票 問29①～⑤）

※成田・下仲・中里他（1995）の特性的自己効力感尺度より「自分が立てた目標や計画はうまくできる自信がある」、「はじめはうまくいかない事でも、できるまでやり続ける」、「人の集まりの中では、うまくふるまえない」、「私は自分から友達を作るのがうまい」、「人生で起きる問題の多くは自分では解決できない」の5項目を抽出して使用した。それぞれの項目について、「そう思う」～「思わない」までの4段階で評価させ、5項目の合計得点を大人のセルフ・エフィカシー得点とした。得点が高いほど、自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高いことを表す。

<大阪市24区>



<大阪市西区>

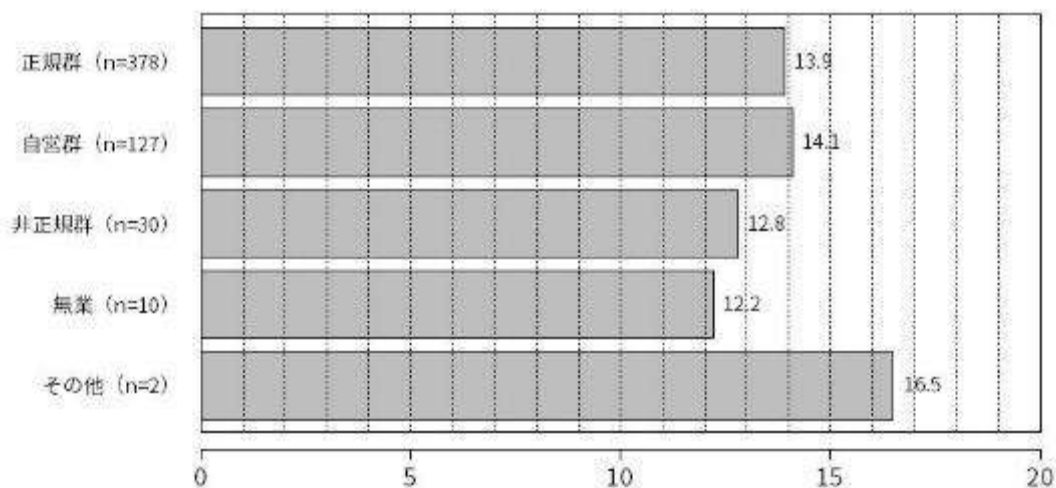


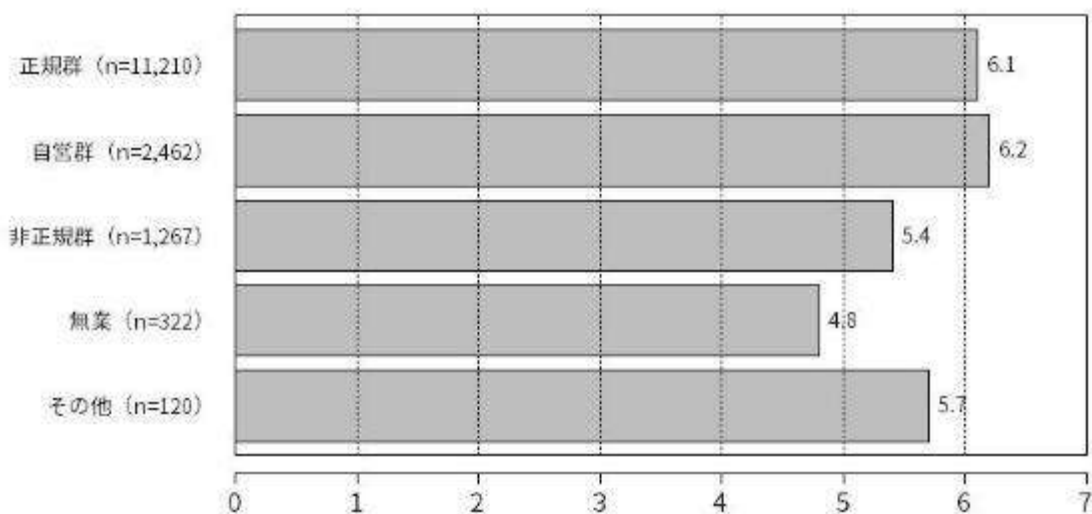
図 197. 就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー

就労状況別に保護者の自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、「正規群」では 13.9 点、「自営業」では 14.1 点、「非正規群」では 12.8 点、「無業」群では 12.2 点であった。

就労状況別に見た、支えてくれる人得点（保護者票 問 23①～⑦）

※「あなたを支え、手伝ってくれる人はいですか」という質問について、「心配ごとや悩みごとを親身になって聞いてくれる人」「あなたの気持ちを察して思いやってくれる人」「趣味や興味のあることを一緒に話して、気分転換させてくれる人」「子どもとの関わりについて、適切な助言をしてくれる人」「子どもの学びや遊びを豊かにする情報を教えてくれる人（運動や文化活動）」「子どもの体調が悪いとき、医療機関に連れて行ってくれる人」「留守を頼める人」の7項目を提示した。それぞれの人物が「いる」か「いない」かで評定させたうえで、「いない」を0点、「いる」を1点とし、7項目の合計得点を「支えてくれる人得点」とした。得点が高いほど、身近に支えてくれる人が多く存在することを表す。

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

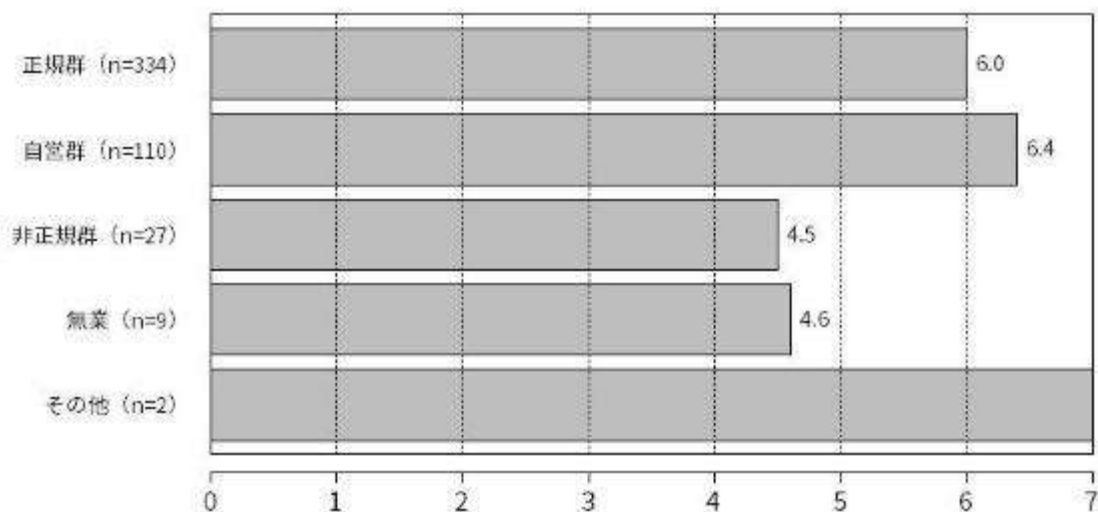
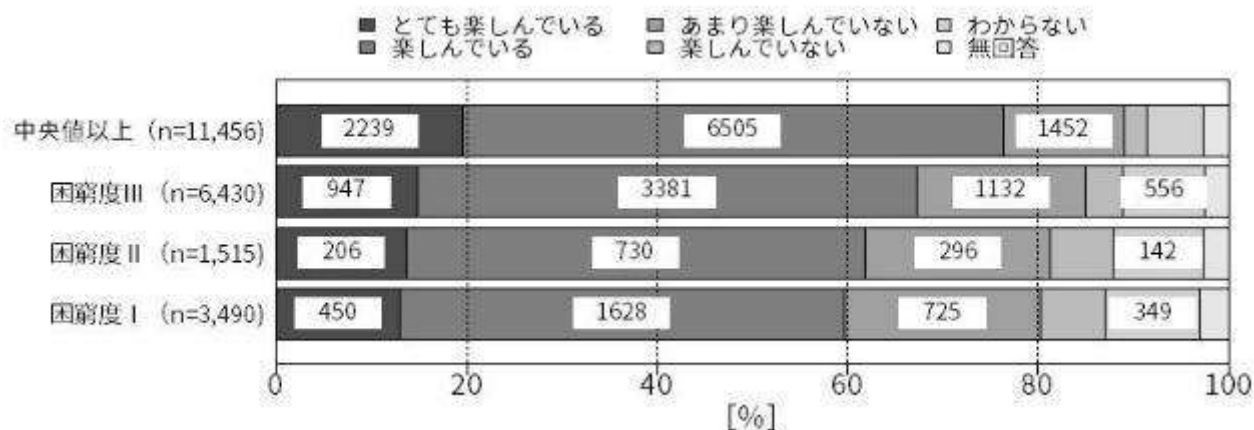


図 198. 就労状況別に見た、支えてくれる人得点

就労状況別に「支えてくれる人」の有無を得点化し、その平均値を見ると、「正規群」では6.0点、「自営群」では6.4点、「非正規群」で4.5点、「無業」で4.6点であった。

困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）（保護者票 問 25(1)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

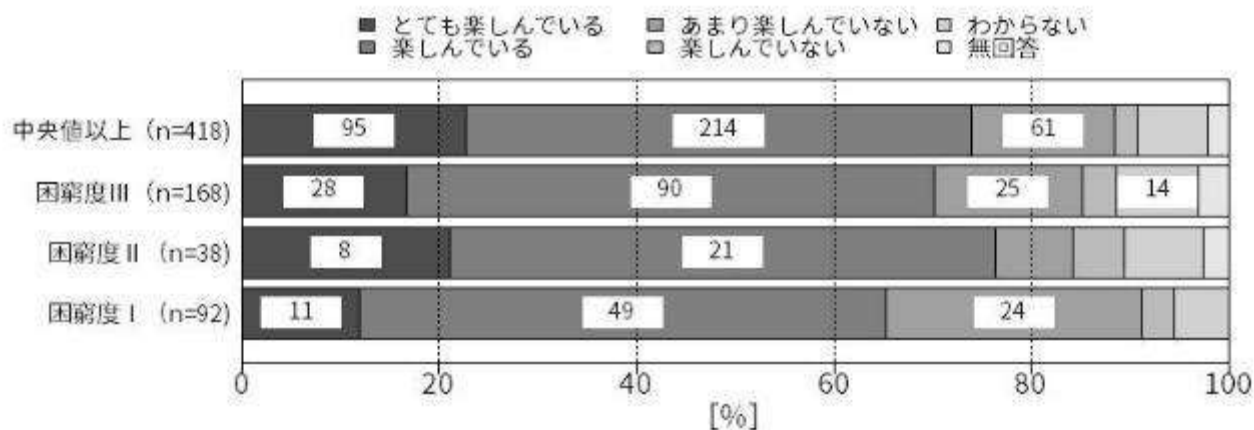
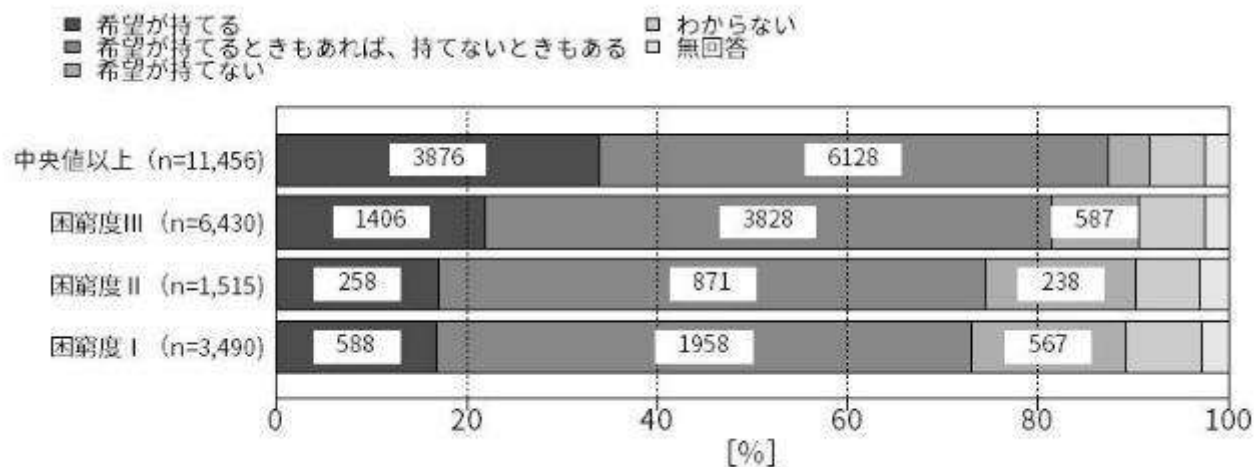


図 199. 困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）

困窮度別に生活を楽しんでいるかを見ると、「とても楽しんでいる」「楽しんでいる」をあわせた割合では、中央値以上群が 73.9% であり、困窮度が高まるにつれて、「とても楽しんでいる」と「楽しんでいる」の割合が低くなる傾向にあった。逆に、「楽しんでいる」と回答した割合は、中央値以上群で 2.2%、困窮度Ⅲ群で 3.6%、困窮度Ⅱ群で 5.3%、困窮度Ⅰ群で 3.3%となった。

困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）（保護者票 問 25 (2)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

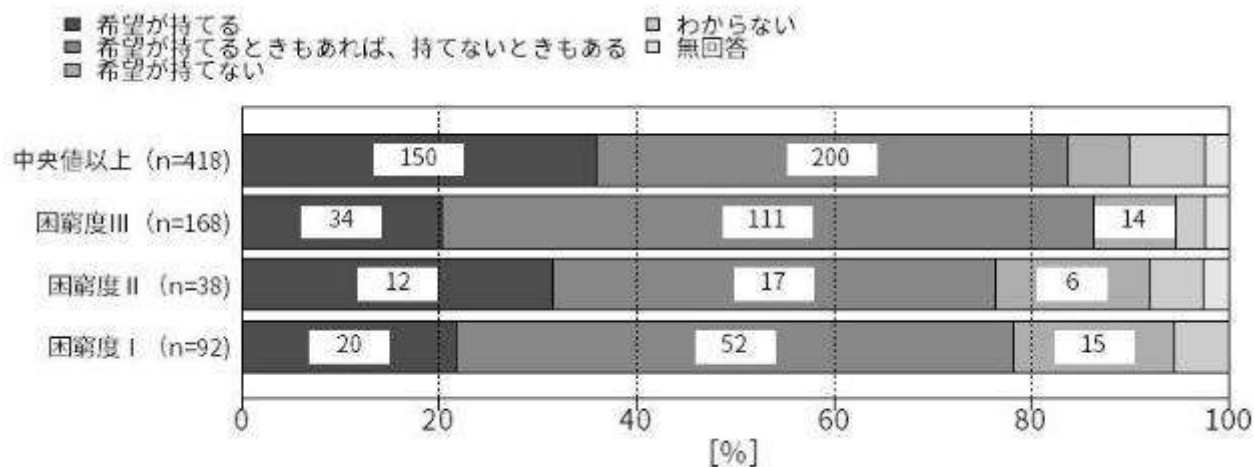
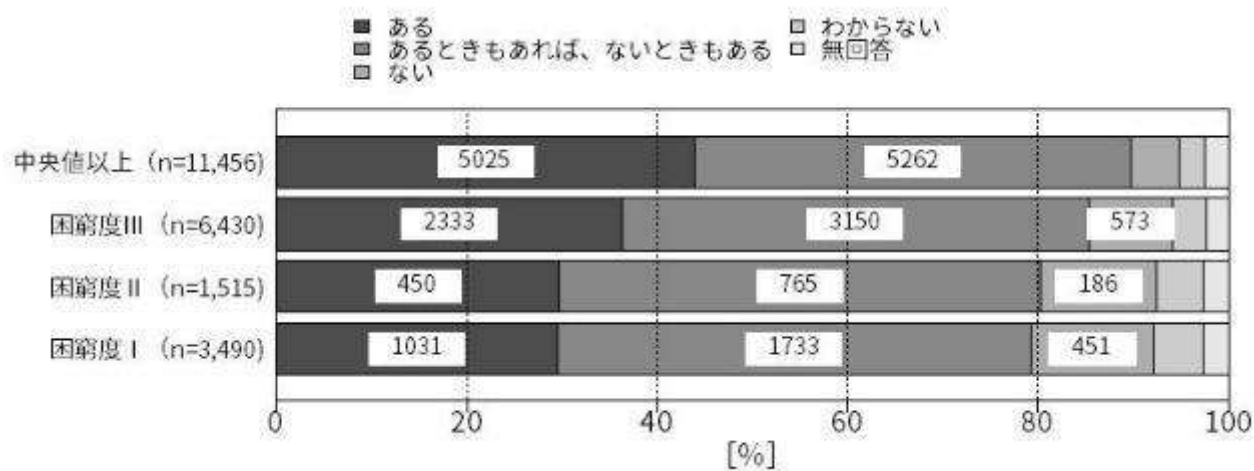


図 200. 困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）

困窮度別に将来への希望を見ると、「希望が持てる」と回答する割合は中央値以上群では、35.9%であったのに対し、困窮度Ⅲ群では 20.2%、困窮度Ⅱ群では 31.6%、困窮度Ⅰ群では、21.7%という結果となった。

困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）（保護者票 問 25(3)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

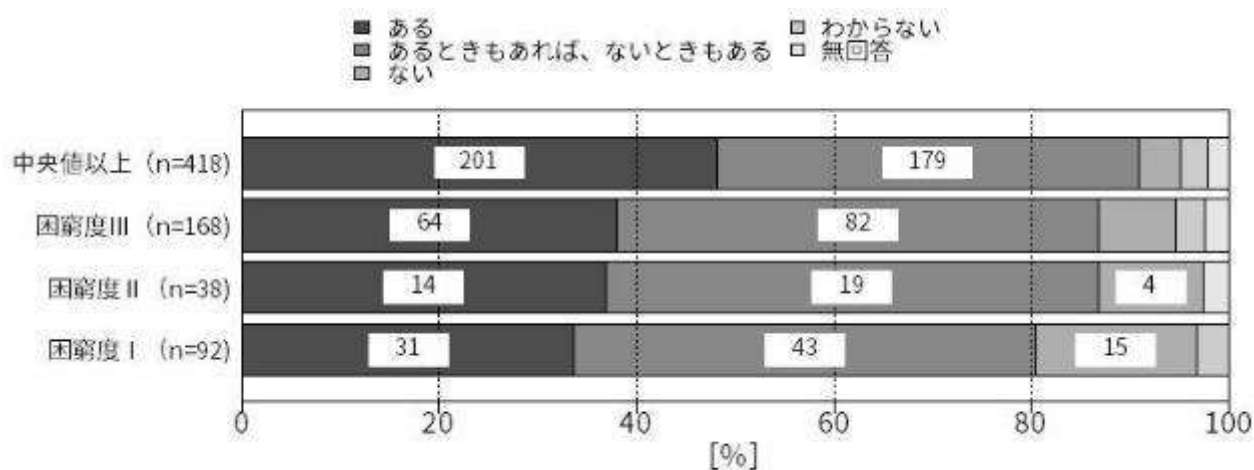
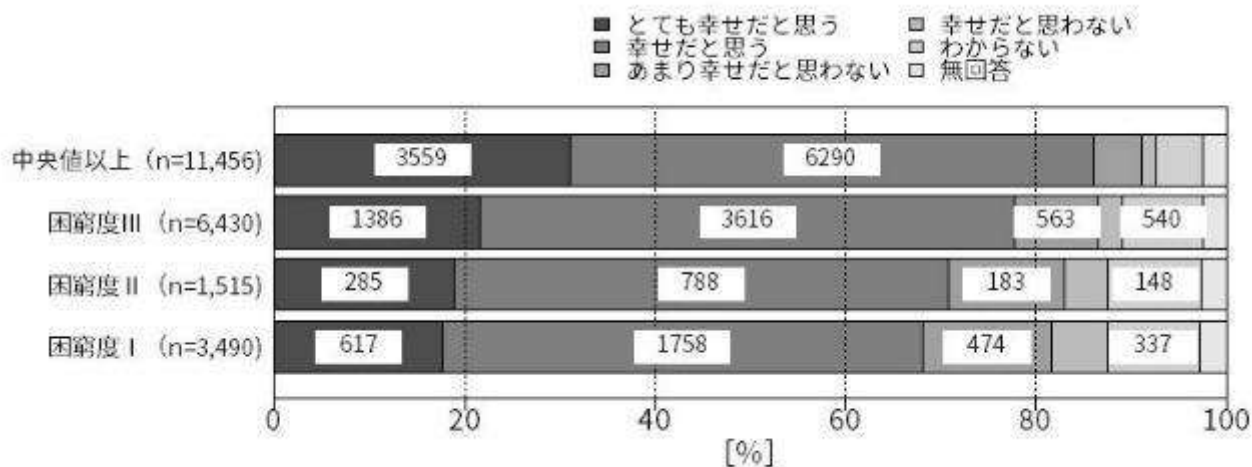


図 201. 困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）

困窮度別にストレスを発散できるものについて、ストレスが発散できるものが「ない」という回答に着目すると、中央値以上群では 4.3 %、困窮度Ⅲ群で 7.7 %、困窮度Ⅱ群で 10.5 %、困窮度Ⅰ群で 16.3 %となっている。

困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）（保護者票 問 25(4)）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

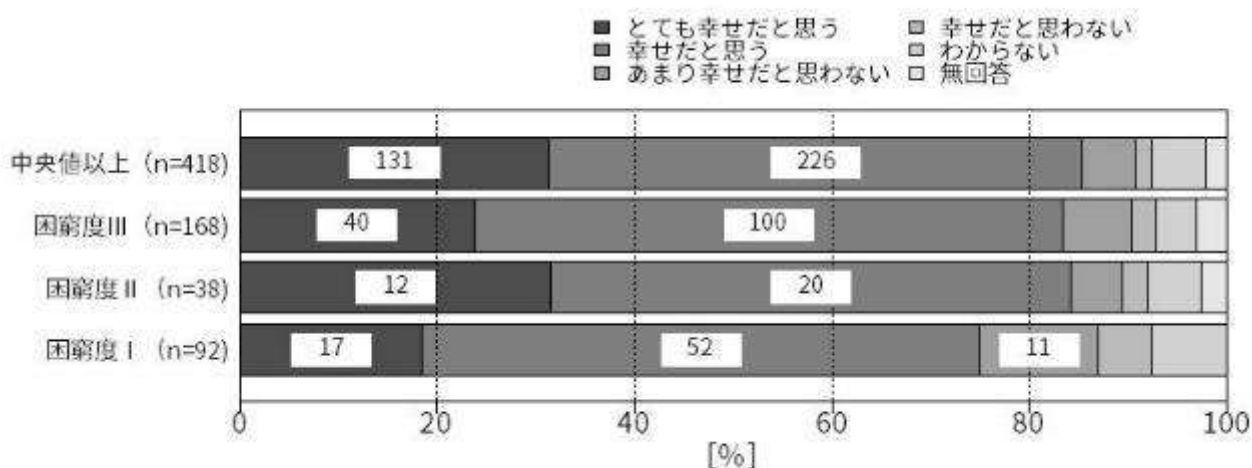
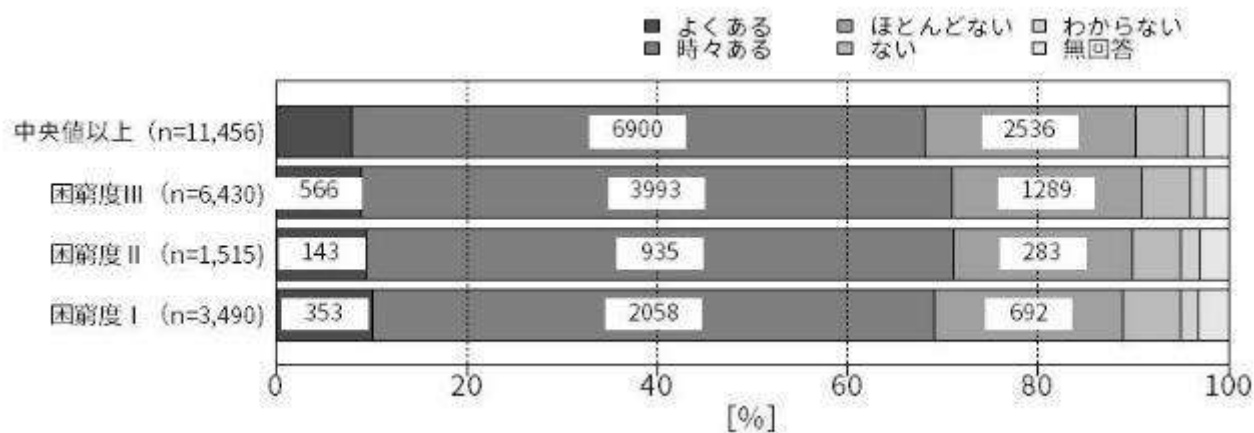


図 202. 困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）

困窮度別に幸せだと思うかを見ると、「とても幸せと思う」「幸せだと思う」あわせた割合は、困窮度が高まるにつれて低くなる傾向にあった。逆に、「あまり幸せだと思わない」「幸せだと思わない」あわせた割合が高くなり、中央値以上群では 7.0 %、困窮度Ⅲ群で 9.5 %、困窮度Ⅱ群で 7.9 %、困窮度Ⅰ群で 17.4 %となっている。

困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと
(保護者票 問 27)

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

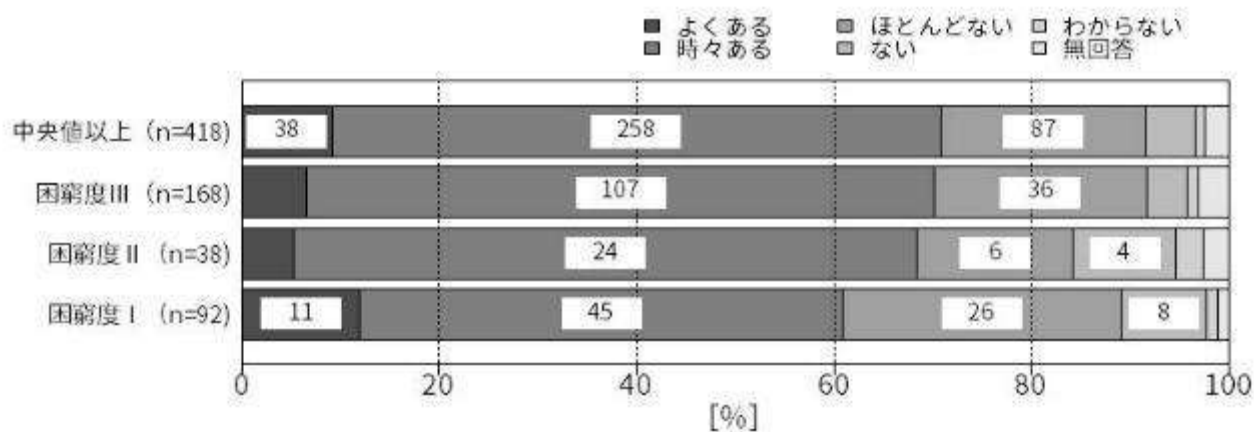
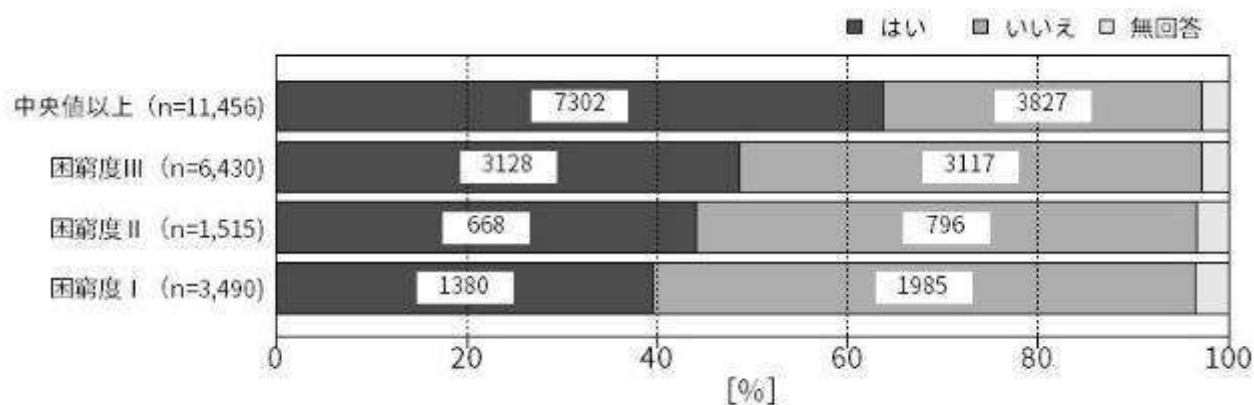


図 203. 困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと

困窮度別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことを見ると、中央値以上群では、「よくある」「時々ある」あわせて 70.8 %であったのに対し、困窮度Ⅰ群では 60.9 %であった。

困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診（保護者票 問 28）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

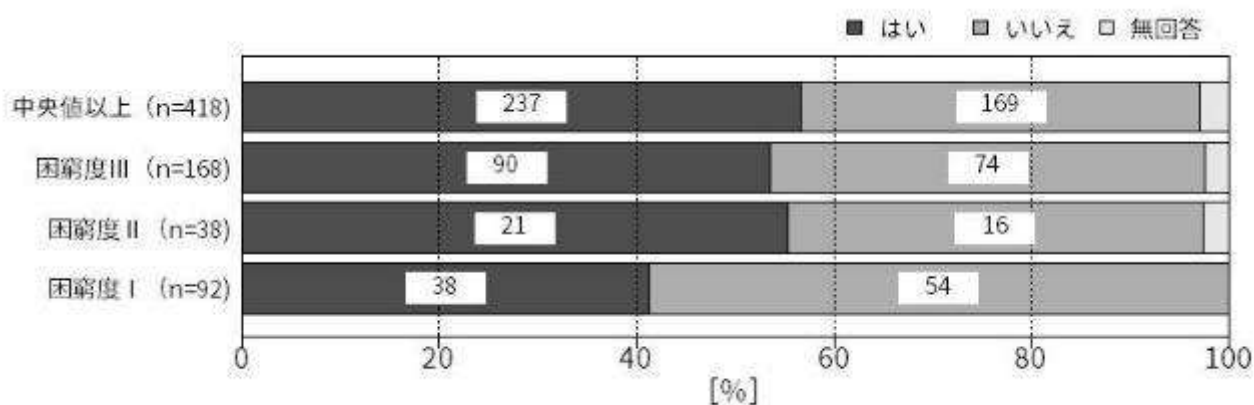


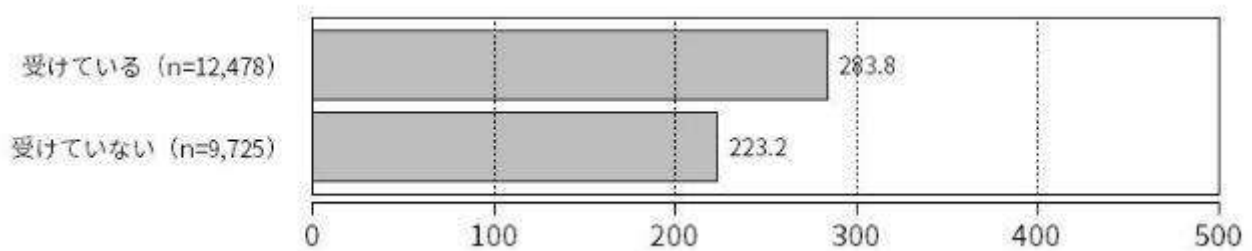
図 204. 困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診

困窮度別に保護者の定期的な健康診断の受診を見ると、「受診あり」の回答の割合は中央値以上群が 56.7%であり、困窮度Ⅰ群では 41.3%であった。

定期的な健康診断の受診別に見た、等価可処分所得の平均値（単位：万円）

（保護者票 問 28 × 保護者票 問 7）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

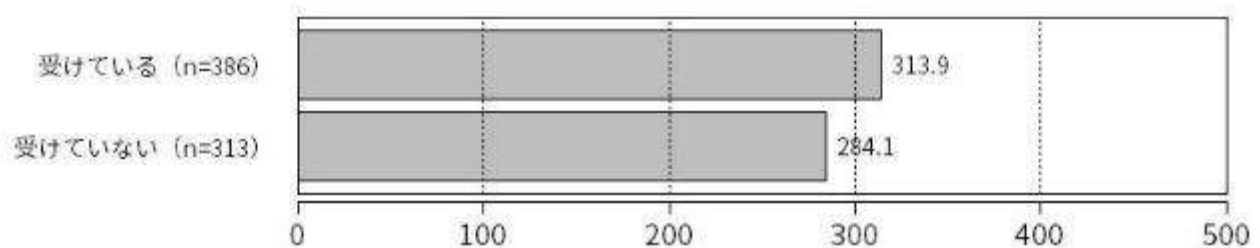


図 205. 定期的な健康診断の受診別に見た、等価可処分所得の平均値（単位：万円）

定期的な健康診断の受診別に等価の可処分所得額を算出すると、「受診あり」では 313.9 万円、「受診なし」では 284.1 万円と等価可処分所得について差が見られた。

<健康に関する考察>

困窮度別に朝食の頻度を見ると、困窮度が高くなるにつれ、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる割合が低くなっている。困窮度Ⅰ群では、週に1度も朝食を「食べない」と回答した割合が4.4%となっている（大阪市全体3.6%、西区5歳児0%）。西区5歳児では、「食べない」と回答した割合は0%だが、困窮度Ⅱ群で「食べないことが多い」と回答した割合が7.7%存在している。

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、子どもと「よく会話をする」との回答が68.8%であり、「週5回以下」では、「よく会話をする」と回答した人は44.2%と、「毎日またはほとんど毎日」の人のほうが「よく会話をする」の割合が高くなっている。

朝食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、19.1点（大阪市18.7点）、「週5回以下」では、17.2点（大阪市17.2点）と、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人のほうが「週5回以下」の人よりも子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高い結果となった。困窮度別に入浴頻度（5歳児）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合が低くなるものの、「週に2〜3回」以下の回答は見られなかった。

心身の自覚症状（子ども）について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で大きな差は見られない。しかし、中央値以上群と大きな差はないものの、困窮度Ⅰ群では、「やる気が起きない」25.6%（中央値以上群に対して、1.1倍）、「イライラする」22.2%（1.1倍）など、心理的・精神的症状を示す項目での割合の高さも無視できない。心身の自覚症状（保護者）を見ると、多くの項目において、困窮度が高まるにつれ、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの割合が高くなっている。特に困窮度Ⅰ群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「聞こえにくい」12.0%（中央値以上群に対して、3.9倍）、「不安な気持ちになる」34.8%（2.5倍）、「ものを見づらい」10.9%（1.8倍）となっている。つづいて、「よく頭がいたくなる」28.3%（1.7倍）、「ねむれない」9.8%（1.6倍）という影響もみられた。

生活を楽しんでいるか、将来への希望、ストレスを発散できるものがあるか、幸福度、を困窮度別に見ると、中央値以上群に対して、それ以外の群では、肯定的な回答の割合が低くなる傾向が見られた。

困窮度別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことを見ると、困窮度による大きな差は見られないものの、中央値以上群では、「よくある」「時々ある」あわせて70.8%であったのに対し、困窮度Ⅰ群では60.9%と困窮度Ⅰ群の割合が低くなった。

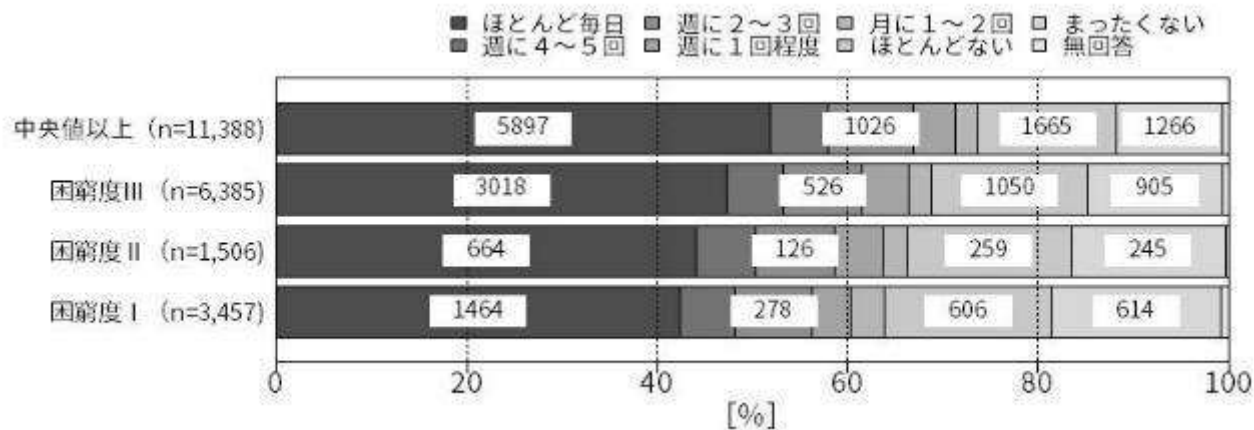
困窮度別に保護者の定期的な健康診断の受診を見ると、「受診あり」の回答の割合は中央値以上群が最も高く、困窮度Ⅰ群（41.3%、大阪市39.5%）が最も低くなっている。

3-4. 家庭生活・学習

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）

（子ども票 問 10①）

<大阪市 24 区>



<大阪市西区>

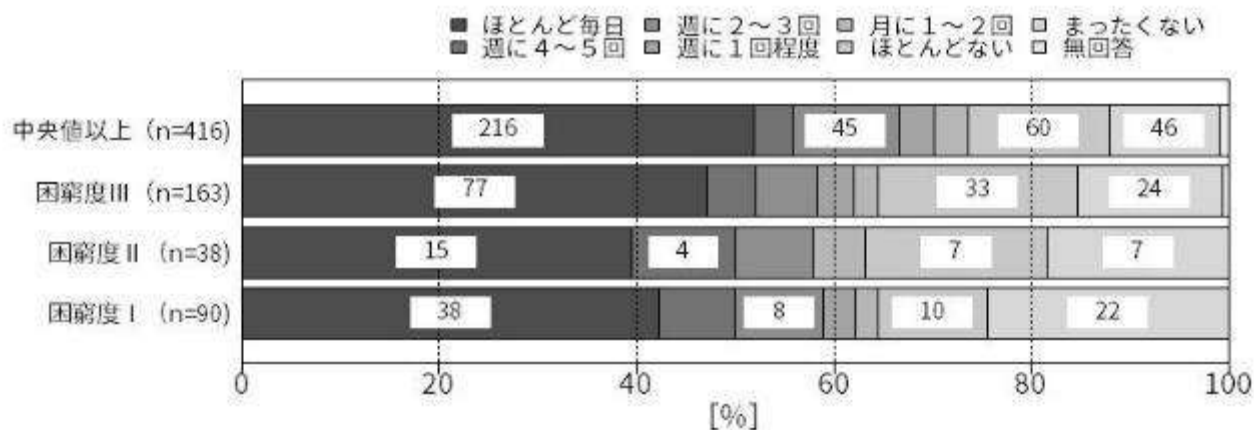


図 206. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「まったくない」と回答した人の割合が高くなる傾向にあった。困窮度Ⅰ群では、「まったくない」が24.4%、「ほとんどない」が11.1%であった。